明治二十九年五月二十四發行

女鑑

第百九號

東京國光社

女鑑第百九號　目録

松田左近の妻



女子の書簡文

世の中には、女子の文章つくり、文かきつゞるなどいふことは、口をまげ、面をくづし、袖をひるがへし、身体をあやなし、謡ひつ舞ひつするやうなるいやしき遊藝と共に、れなじやうに、極めて用なき、あらでもの事のやうにのみ、心得たる人あれど、大いなる誤謬にして、さらむ遊藝と同視すべきものに非ず。もと、言語を以て思想感情を、自由自在に語りも述べも爲し得るといふ事が、世の中の人の尊き所なると共に、文字を以て、互にいはまほしき事、思ひ出づるまゝの事を、滞りなく書きあらはすといふ事も、又、下等動物と異りたる人類の、世に尊むべきいはれの一點なり。

それも、もとより、美文といひ或は雅文といひ、すべて文學上の文章ともいふべきものは、それは、その專門家ならずば、さてもあれ。日用文といひ書簡文といひ、すべて、わがいはまほしきことをいひ書き、人に告げも語りもすべき事を、書きやるほどの普通の作文ばかりは、一わたり、思ふまゝいはまほしきまゝを、書き能ふやうならでは、

世に不便いふばかりなく、獨り一身の上の不便のみならず、嫁きては、良人の不便、一家の不便とも成るなり。今の婦人社會の三十歳以上の者は、大かたは、假字文字のたどり書きさへ、ことむづかしげなるが多けれど、それは、女子に文字を忌み嫌ひたる老朽の世の教育に生ひたちたる者なれば、今更にあやしむべくもとがむべくもあらねど、今の世のわかき女子にして、書簡文のはか〴〵しからず、亂雑なること奇怪の事なれ。元來、今の學校教育にては、文筆といふ事を、餘りに侮り去りたる如きけしきあるは、吾人が、大に面白からぬ心地もせられ、自、眉もひそまる所なりかし。

今の女子の書簡文は、實に極めて亂雑なるものなり。又、極めていひかひなきはかなきものなり。其の亂雑なるはかなくいひがひなきものを、うちまかせて、大別する時は、まづ、「一筆申上〻時下春寒の候」といふやうなるものにて、漢語を「候」「〻」となどの詞にてつなぎあはせたる如きもの。次には、それが、なほ、一入やさしくなりたる如きものにて「文して申上〻此の頃は暑さ日ましにはげしく御座候處如何に御暮し遊ばされ候や」などこのやうなる句調のもの。次には「こそ侍れ」などを用ひたる所謂和文句調のものなり。

そが中にて、漢語を「候」などまでつなぎたる如きものは、最あやしきものなり。元來漢語は、外國の語なり。我が國の文、我が國の語のあらずばともあれ、立派なる一かどの我が國の文字あるに、その我が國の文字をうちすてゝ、外國の言葉を用ゆるは心なきのみにはあらず、漢語は、その角ばりたる文字の如く音も調もいとむづかしきものにて、優美の女子には、とりわけて似つかはしからぬものなり。

また、次は、和文などをかつ〴〵ならひ覺えたる人の、よくするものにて、「こそ侍れ」など云ふ和文流にかきながす事なり。これは、源氏物語などのむかしに用ひたるいとも優美なる言葉にて、しかも、我が國の文なれば、雅文などにはよろしけれど、日用文、書簡文にはあまりに雅に流るゝのおもむきあり。凡て、むかしの文は、おぼろげにて、霞中の月、やみの夜の梅、霧中の鴈の如きの風情多ければ、一方にては意味の通ぜぬ事多く、また、今より强に似する時は、思ふやうにつゞりつくせぬふしの多かり。日用文は美なるふし雅なるかどは、よしや遠しとも、思ふ事のたど〴〵しからずつゞれ、また、人のよみても、明に意味の通ふかたをよしとす。

此三つの文の内、まづ、よろしきは、第二に云ひし「文して申上り〻やう」の文なり。さ

れど、これも、ともすれば、「文して申上りまゝ時下秋冷の候」などと、漢語をまぜ、或は「こそ侍れ」の言葉などを結びつけなどす。さやうなる事ありては、よみよくもあらず、されば、此文をして、いづくまでも平易に、思ふ事を、思ふまゝ、たやすく、分りやすく、迂遠ならず、むづかしからず、人にも己にも、分りやすからむやうに、ものしたらんがよし。さても、是非に一わたりは、容易く書きながされまほしきは、書簡文なり。美文雅文も、女子にはよき樂みなり。よき件なり。これもひまあらばあらまほし。文字も、上手ならずとも、人も我も讀みやすからむばかりには、習ひもればゐられたし。さなくては、人の妻となり、一家の母となり、日用に、自事缺くあれば完全なる妻とも母ともなる能はずなむ、孃たち。

論説

島の曙

肝付兼行

本編は、かつて、大日本婦人教育會に於て、演説したるものゝ速記なり、普く世の嬢たちの高覽に供せむため、こゝに女鑑に寄す

私は、肝付兼行で御座ゐます。此の度、常集會を御開きになるに就て、出て御話をするやうにと云ふことでございまして、罷出ましたので御座ゐます。既に御承知かも知りませぬが、私は、元來、軍人の事で御座ゐますから、其の持前として、貴婦人方の前に出で、御話をするに足るだけの貯へは、素より無いので御座ゐます、唯、我邦が海國でありながら、ドウも一般國民の思想が、海國的に成立て居らぬところから、私かに憂ふるところが御座ゐまして、不敏をも顧ず、數年前より、時々教育社會に向つて、何か詰らぬ事を申して居るので御座ゐます、つまり其の望は、我が國民には、海事思想が足らないから、一般に此思想を貯へて貰ひたいと云ふので御座ゐます。然るに、昨年清國と開戰以來は、軍人のことゝて、談話の御求を受たことも、往々あつたので御座いますが、公務多忙の結果、何分暇が御座ゐませんから、どちらへも御斷りを致して居りました、ろして今日とても、なほ心が散亂して居りまして、何分にも、未だ思想が纏まりかねて居りますから、實は今回は御斷りを申し上げたかつたので御座ゐます。併ながら、私は前に申す通りの、一の冀望を抱いて居るもので御座ゐますから、ドウか折だに有つたなら、第一に婦人社會、第二に教育社會、第三に貴族社會と、斯ういふ順序に、自分の意見が吐露してみたいので御座ゐます、故に誠に好機會と存じて、

つい〳〵御受は致しましたが、思想の纏つて居らぬ時であるから、甚覺束なく思ひます。偖、今日の演題は、誠に妙な演題で御座ゐますが、是も御話し申さなければ解らぬ。つまり其精神は、是より申し述べる話しを、能く御聞取下されば、自然に解るが、私が、抑、斯樣な妙な演題を持ち出しましたのは、ちやうど演題を御求の時に、臺灣に參りて居る友人の許より、通信が御座ゐまして、其返翰を認め、其終に、歌になるやならずや、詰らぬ寢言では御座ゐますが、臺灣に高砂の名のあるところから思ひつきまして

起いでし大和心やいかならむ名も高砂の島の曙。と

書付けたので御座ゐます、依て其の際のことゝて取敢ず、此の歌の末の句を取りて、御求に應じたに基くので、其の演題の歌めいて居るのも、故なき事ではありませぬ。

ソコで、いろ〳〵と述べたいことも澤山てありまして、何から述べて宜やら、自分なから解らぬ位であります、ドウか、筋道の立つた話しに、まとめて述べたい心得ではありますが。要するに、間口の狹くして、奥行の深い話は、爲になつても、面白くないものであります、間口を廣くして、奥行を淺くし、いろ〳〵の事柄に涉りました方が、御退屈にもなるまいかと思ひまして、其の積で述べます。先にも申す通り、私の望は、國民の海事思想を、飽まで發達させたいといふに外ならぬのである、ソコで、此の思想を發達させやうといふには、先、習慣をソコに向けるやうにするのが、何より肝要と思ひますが、今日、此處に見受けまする所の御婦人方は、概して、是より良妻となり、賢母とならるゝ御方であるから、最もコゝに心を向け意を留められねばならぬ。即、妻となりては家政を執り、母となりては家庭教育を司どる責任は、どうしても御免れなさることはできないのであります、故に、

社會の習慣を改めんとし、又、一の新習慣を造り出さんとするには、我々の繼續者たるべき、將來の國民を養成する教育者社會は勿論、之に先ちて、婦人社會には、最も之れを望まなければならぬ。又、次ぎに、貴族社會に其熱心者の出んことを望まなければならぬ、諺にいふ通り、「上の好む處下之れより甚し」で上にたつ貴族に、其の熱心者が出來るときは、下の者の說かずして之れに靡くは、自然の道理であります。是れ私の第一婦人社會、第二教育社會、第三に貴族社會に向つて意見を吐露せんと、希望した所以でありますが、今日遂に、此第一の希望を達すべき緒に就きましたのは、誠に滿足の至りで御座ゐます。ソコで順序を立てゝ御話しを致しますには、先

世界海事　世界の海事が、今日までに發達した歷史を御話して、是れと、我が邦に今日迄の海事とを、比較的に御話致し、そして我が邦の地位地形、及世界に對する關係より、國民の性質を述べ、それより、我が國は斯ういふ國で、我が國民は斯ういふ民であるら、將來我が敷島、女子、否海國民の母として其子を育つるには、如何なる處に眼を注ぎ、如何なる點に心を嚮けるが宜いかと云ふ所に說き及さなければならぬ、私は軍人のことでありまして、教育上には、經驗のない人間でありますから、理くつはよいやうでも、到底實際に行ひ得られぬやうなことを云ふかもしれませぬ、此の御席には、教育に經驗のある御方も大勢れいでゝありませうから、ドウぞ其の邊は然るべく御聽取を願ひます、併しながら、今日は、時間も御座ゐませぬ事ゆゑ、世界、及、我國の海事歷史等を詳しく述ぶることは迚もできませぬ、依てそれらの話は、他日に讓りまして、唯精神をろこに取り、思ひ浮ぶまゝに、御話を致して、御免を蒙ります。

偖、此の度の、日清戰爭の結果は、喋々する迄もなく、

我が國家未曾有の大慶事で、國の位置も、數等進み、實に何と云ふ賀辭を唱へて喜んで宜いやら、其の度が分らぬ位で御座ゐます、乍併是れに由りて將來を考察致しまするど、對岸に永久の敵を作りたのみならず、間接に、又、幾多の敵國をつくりたので御座ゐます、故に、勝て冑の緒を締ろといふ誡の如く、我が國民たるものは、此の戰勝を徒に大慶事と喜ぶばかりでは濟まぬ、要するに、這回の戰爭は、世界的運動の端緒を開ひたので御ざいますから、其の直接、間接の敵に對する覺悟は勿論、運動の端緒を開た以上は、飽までも之れをなし遂げる決心がなくてはなるまいと思ひます、ソコで此の決心に對して、何が第一に必要であるかといふと、申までもなく、兵力である、併ながら、其の兵力にして、何程精鋭であつても、今日文明の兵力には、之れに相當の財力が伴はねば、恰も根のない喬木、水のない生花と一般で、永く其の活氣眞勢を保つことはできませぬ、昔、彼の軍にかけては鬼神と言はれた、第一世奈勃烈翁帝に、或人が「陛下戰爭をなすに、一番必要なる者は何にて候やと問ひけるに「金なり」との答へでありましたから「然らば、其の次ぎは何にて候ふや」と問ひけるに、又金なりとの答へでありまして、それより其の次々々と、十六返まで問ひ重ねましたるに、唯「金なり」との一言を以て、答へ通されたといふ話しがありますが、兎も角も、金が軍をするに、何より必要なるものに相違ないと思ひます。故に國の兵力を强盛にしてやうといふには、先、國を富さなければ、ならぬ、ろして、又、國を富すには、兵を益々强くしなくてはといふことを考へなければならぬ、世によく富國强兵と云ふことを申しますが、富國と强兵とは、實に相離れることのできないもので、即、「國富まざれば兵强からず、兵强からざれば國富まず」といふことを知るのが、自今益々我が國民に必要であ

つて來たのであります。ソコで、我が國が今日世界に對して、ドウいふ位置をなして居るかといふことを略して申し上げます。我が國人中にて、北條の時代に、時宗が、元の兵を却けた事、又は、豐太閤が、朝鮮征伐をして、皇國の武威を、海外に震はした事を以て、往時、外國船の、我が邦に寄付かなかつた原因として居る人も往々ありますが、私は決してサウではないと思ひます、即、其の寄付かなかつた所以は、片隅、即、文明國と隔たることの甚遠い、世界の片田舍に在つたが爲に、文明の國々に於て、我と交通するの必要がなかつたのに外ならぬのであります。一躰世界に交通の大道を開いたのは、今を距ること、殆、五百年前、葡萄牙國王ジョン一世、第四の王子ヘンリー、即、航海者顯理の綽名を以て、世界の航海者に、誰知らぬものはない人で、彼の閣龍バスコデガマ、又、ずつと後れて、麻是蘭の如きは、皆、此人の思想を、仕事に見したに過ぬのでありますでありますが、我が鎖國の錠を開きたのは、彼の米國のペルリー提督でもない、全くは、蒸氣であると言はなければならぬ、若、此の、蒸氣の發明がなくて、蒸氣船ができなかつたならぞ、日本の開化は、まだ〳〵後れたるも知れない、先、斯ういふ譯で、外國との交通が後れ、世界の進歩に伴はなかつたのでありますが、我が國の武威が、海外に及んで居た爲に、外國人が怖がつて、近かなかつたといふことは如何でありませう歟、此の事は、識者には分りきつたことでありますが、よく御考あらんことを望みます。(以下次號)

平和事業と婦人

長井蘅

人間の目的にして、財を貯ふると、健闘するとのみに存せざるを知らば、國家なるものも、亦、必や、殖産

と兵備にのみ務むべきに非ざるを諒するならむ、方今世界の上に國を立つるもの、未だ全く其の武裝を解いて、共に昇平を樂しむ能はずと雖、國家の任務は、自衛の道にのみ汲々たるべきに非ずして、又、必、汎く世界の奎運を啓拔し、人類の幸福を增進するの淸高にして、且名譽ある責務を有することを覺らざるべからず、然るに武裝は、固一の手段にして、決して最終の目的に非ざることを忘却し、手段を手段に求め、枝葉より枝葉に走り、遂に所謂収拾すべからざるに至らむ、啻に其の淸高にして、名譽ある事業、精神に負くのみならず、又其の完全なる自衛の道を得たりとも云ふべからず、今日國際上の道義未だ明ならず、詭謀連りに行はれ、凶器幾たびか弄せらるゝより、個人の間にしては、兎ても行ひ得べからざる程の慙德汚行も、國家の間には、公然之れを爲して、恬然省悟する無きのみならず、之れを以て無乃政治家の功績なるかの如くて、歌頌するものありと雖、此くの如き所行の漸次に薄らぎ行くべきは言を須ゐず、所謂寡婦孤兒を欺いて、人の天下を傾くるが如き功名は、假令自國に取りて、一時利益ありとするも、斷じて之れを斥けざるべからず、而して此くの如き際に當りて最も明確なる判斷を有すべきものは、多く利害の外に立つものなるべきを以て、世の道學先生は言ふも更なり、吾人は最も先づ之れを世の巾幗社會に求めむと欲するなり。

司馬子長は、勇士猛卒の萬死を冒して辭せざるは、歸來豐頰曲眉、己が心に懸ひつる美人の一粲を買はんと欲するに外ならずとの樣に論じたり、世の美人にして、盡く健闘奮搏を稱すれぞころ、之れを以て他の憐愛を買ふの手段ともせめ、世の婦女にして、若しも盡く財利に奔るを以て無上の智なりと賞賛するに至らむ、天下の丈夫兒亦皆相牽ゐて其の俗を成すに至らむなり、婦女子の志尚が一國の興亡、社會の[illegible]に關ト

るや大なりと謂ひつべし、故に云ふ、彼の歐西の巾幗社會に發生せる萬國平和説の前途や、亦必しも藐視すべきものに非ずと、我が日出の帝國素より夙慧明敏の女姓に富むと稱す、若し此の機運に導き、更に之を利用して以て來む世紀の文明を開拓せむ、豈、絶大至烈の芳蹟を揚ぐべからざらむや。

顧ふに、最近の役に於ける帝國女姓が、赤十字事業に盡せる功烈は、吾人の深く銘紀して遺る〻能はざるところ、赤十字の事業たる固より一視同仁の主義の上に立つものにして、單に敵愾の感情に發するものと同日に論すべきに非ずと雖、之れに伴ふ世界の平和、人類の幸福なとの言へる思想に至りては、果して幾何程迄我か帝國女姓の脳髓中に存在し居るべきかは、尙考察を要すべき點なりと信す、此く一猜したる後に於いて、其赤十字事業に於けるが如く、我が皇后陛下が殊に嘉奬眷護あらせられ賜ふ美術保存及び發達の事業の如きものに向つて、帝國一般の女姓なるもの〻、果して戰役に伴ふ事柄に於けると、其の平和の事業に向つて、盡すところの甚比較を得ざるが如き心地せらる〻に非ずや、奈良、平安の建築、若しくは繪畫にして、古代女姓の殊勝なる心掛けにより製作若しくは保存せられたるもの多々なりと雖、今日の女姓は、却つてか〻る事柄に忠實ならざるに似たり、吾人は今回組織せられたる古社寺保存會に、一人の女姓委員の任命無きを以て、明治閨秀の爲に、痛惜する莫き能はずと信す、之れを要するに、吾邦の女姓は、過度に差別の見にか〻さはりて、餘りに平等の思想に乏しきが故に、文明國の女姓として、尙華やかならざる心地せらる、是れ一言其の反省を促す所以なり。

女子敎育一班（十六）

三輪田眞佐子

上に述べつるごとき資格を具へてこそ始めて靑年女子の師たることを得るなれ。されどなほ師たる職分を全うするに必要なるものあり。そは至誠と熱心となり。中庸に曰く至誠如神と、果して師たるもの至誠を懷かんには、自然に弟子を感動せしめ得るのみならず、感應の理によりて、弟子の心中を洞察し得るものから、その曲れる心を矯め邪なる念を正し得べし。且つ又、師たるもの弟子を敎ふること熱心ならむには、旣に精勵の心あるものはいよ〳〵心を傾け、惰弱の性あるものだにおのづから廉恥を知りて、しらず〳〵化育せらるゝに至らむかし。

しかるに、今や、もろ〳〵女校なる敎師の位置に居るもの、そが學術につきては相當の資格あるもの乏しからざれど、至誠と熱心とのありやなしやは如何はしきもの多しと世人はいふめり。果して然らんには、いかでか弟子を感動し、將た猶發せしめ得ん。旣に感發せざるむか、女子の德操を養ふにつきては、秋毫だにしるしなからむ。然のみならず、師たるものに至誠及び熱心の特色なきときは、そが弟子たるものはよし業を卒へんも、單に明論を記憶し得て、一瞥さかしきものとならむも、ぬぞだまの黑き心は露だにかはらず、甚しきは、ものしり顏に喋々する女子となりて、遂に世のため浮薄の源をなさん。あはれ、知らざるか、德光は默して、いやまし美はしきものなるを。

をさ〳〵德育を全うせんには、師たるもの言語を以て弟子に敎へんよりも、行爲を以て摸範を示すべきなり。見よ、かの松柏もとよりもの言はざれど、その霜に堪へ雪を忍びて、綠色いよ〳〵まさるを。知るもの誰かその操を仰がざらむ。されど師たるものも敢て多言を用ゐずとも、凜乎たる氷心あらまほしとは、弟子たる

女生がおのづから貞操の徳を養ふよすがとならむかし。

また師たるものに至誠と熱心なうして、生徒たるものがその訓戒を馬耳東風にきゝ過すことを責むるも、穏當にあらじ。

されど嚴重に過ぐるは決して徳育を全ふする道にはあらず。もし嚴重に過ぎんか、弟子たるもの忽ち恐怖の心を起し、たゞ師の目前ばかり君子の外容を飾らむも、內心は依然たるならむ。然るに至誠は禁ずる能はず。熱心は抑ふる能はざるものから、稍もすれば嚴重に過ぎ易し。故に師たるものはこれを和するに、温厚の徳を以て、さながら春陽の萬物を煦育するが如く、慈母の赤子に臨まんやう、弟子を恐れしめず、將た耻かしめずして、感化すべきことにこそ。

信に師たるものかゝる德を以て弟子を敎育せんには、必ず感化の目的を達すべし。もし師たるもの冷澹ならんには、その言ふことよし當然のことなりとも、遵奉する心うすかるべし。誠に弟子たるもの至誠にして熱心なる師に近くときは、單に師が四方山のはなしをなすばかりにすら、悲哀のことには同情を表はし、正義のわざには同感を催し、覺えずたるゝ一點の紅涙滿座ために袖を潤してこそ深く道心、弟子の骨髓に徹して遂に終身の心得定るものなれ。

ひとり注意すべきは、女敎師は多く愛憎の情深うして稍もすれば嫉妬の心を起すを以て、善を善とし、美を美とすることを忘るめるより、弟子に完全なる德育を施す能はざることあらん。亦女敎師は男敎師よりも、心弱く且つ挾ければにや、慈悲の情深きにかゝはらず、殘忍に流るゝことあり。されど女生は女師を恐るゝことと男師を恐るゝよりも甚しき例なりとかや。されどおのれは信ず、苟も師をもて任ずるものは、文字なき平凡の婦女の如き性癖なきものぞ。亦祈る、さることあらざることを。

これまでわが國には女敎師いと少けれど、勢ひ青年女子を敎育するに、男敎師を恃みとせり。勿論女子は弱点多きものなれど、男子の力を假りて欠点を補ふはよからむも、女子特得の道德につきては、能ふべくも女敎師を推して摸範となすこそよけれ。近來女子敎育の衰退する所以は、かゝる摸範とすべき女敎師少なきを以て、さながらしをりせで深山にわけ入りし如く、迷ひに迷ひて偶々あだし小路に陷るものありしを見るものから、世の父兄たち前車のたはるゝは後車の戒と思ひけん、結果なるらむ。今日こを挽回せざれどたゞ後進女子の不幸なるのみならず、國家隆盛を防ぐるは必然の理にこそ。

貧賤の德

墟井ふく子

おのれ、もと。下愚、貧にしてたのしむなど云ふおのづからの德は知らねど、いま業を修むるにあたりて、貧賤なる方の中〳〵に益ある事をさとりぬ。

富貴なる家に生れ出でゝは、心ある父母ならでは、子のかなしさに迷ひて、やみとなる事多く、あはれ、子寶にます寶はあらじとて、黄金白金をさながら土塊の如くにうち捨てゝ、うつくしき衣を、あつくまとはせ、山海の珍味をつらねて食はせ、よろこぶ事をのみせさせ、箸より重きものはもたせず、藥より苦きものは知らしめず、茶をたつるより外に家政とればしき事も習はしめず、敎ふる事も遊藝にのみ心を入るれど、長じても之に慣れ、學びの庭に通ふにも、他へ行くにも、車にて送れど、體操などさせ、消化よき滋養物をのみ食するも、脾胃健康とならず、寒き折りは、ショールとか云ふものに、あつく包み、甚敷きは車の上に、脚爐と云ふものを載せなどす。かゝれど、ともすれど、肌にもふれぬ風のふと身にしみて、氣管とろこゝ、肺

病をひき起しなどする事多く、一夏、海水浴に行かざれど、死なむばかりにくるしがり、巳れいつも飽食暖衣、自、世にたかぶり、他の饑寒に瀕する者を見ても、つゆ憫む事なく、反て嘲り笑ひなどす。之にかしづくものも、並々の者は、大方其子の色を見、氣をはかり、あしき事あるもいさめず、足らぬ事あるも敎へず、親によろこばれんとて、わけもなき事をほめそやし、折り〳〵はまがりし事まで、才ある和子よとて聞ゑなどして、たゞ心をそこねぬやうにのみつかうるものから、誠に上知なる子ならでは、奢りはしひまゝに長じて、堪忍の心はつゆなく、欲することは、去ぜしもゑ堪へず、心のまゝにふるまひ、つゆ叶はぬ事あれど、いかりたけりて、人をのゝしり散しなどす。また世の中に出づるも、子方が如く貧賤なるもゝの返りて人に驕らるゝ由を聞ゆるものは、あらずして、こびへつらひて、起つにも、居るにも、從ふもののみ多ければ、いつも己は上のものと心得て、長者にもゆづる事なく、人をあなどりかろしめ。何事を云ふも、はやされ、をかしがらるれど、淺ましき事までを云ひて、心あるものに笑はるゝを知らず。誠の道を敎ふるの師は、嚴格に敎へ導くべけれど、たゞ藝をのみ敎ふるの師は、誠に之に敎へんとはせで、その氣に合ふやうにと勉むるもの多し。かゝれど、下愚ならぬ者も、心ために昧むに至るべし。

貧賤のものも、子を思ふ親心はつゆかはらざるべけれど、財乏しければ、美服も着せられず、欲するものも悉く之を與ふること能はず。されど誠の下愚ならぬものは、我がまゝの心も起らず、おごりも長ぜず、別にかしづきの人もあらず、親々も巳の職業にをはれて、うち捨てをく方多けれど、智も、能も、おのづからに長ずべく、美味もつねに十分ならねど粗食もなほ快く、衣もつねにうすければ、氣候にもさばかり冒され

す、他出するにも常にあるくを以て、足も固くなりて、脾胃もすこやかになり、馬車、車に追はるれど、止むを得ず道にも中せずなり、世に交るに、從ふ人もあがむる人もあらねど、おのれとおくるゝやうになり。物云ふも聞かれざれど、自然とつゝしむやうになり。人もくみせねど遊ぶ事も少く、學びの庭にありてもはゞかる方なく師にとがめらるれど、おのづと過ちも知れ、父母の辛苦を見れど、おのづと、辛き事、にがき事をさとりて、思案もいで、分別もつき、くるしさをも常とすれど、堪へ忍ぶ力強く、遊藝こそ知らざれ、庶人の業は、おのづからに覺え安うて、身を立て、家を安すれど、誠に下愚なるものゝ外は、大方不孝なる事もまれなり。むかし山崎闇齋、會津侯にその樂をとはれし時、之に答へて、侯家に生れざりしが、大なる第一の樂みなり。今の諸侯は深宮の中に生れ多くの人にかしづかれ、不學、無術、聲色に徇ひ、遊戯にふけり、之が臣たるものゝ主意を迎へ、因て之を稱譽し、本然の性をして消滅さする事多ければなりと云ひけるが、げに道理と思はるゝまゝに、かくなむ。



松田左近の妻

壚井ふく子

ひとしく之れ水なり。深くして淵となり、淺くして瀬となり、激して湍となり、懸りて瀧となり、日うらゝかに、風和げど、微波も起らず、水面、鏡の如きも、一旦風荒れ、雨躍れど、鞺鞳澎湃、洶浪天を打ち、一靜一動、一緩一急、境遇の異なるに從うて、其觀を殊にすと云へども、水の水たる所以の本質に至ては、固

より一致あるにあらざるなり。

國治まり、世の中やすく、君たるの君に、よく臣の臣たるの道をつくしてつかへ、再び亂れぬやうはかるが、[illegible]乃、良臣。國亂れ、世もおだやかならず、君は君たらずとも、臣の道をつくして、君が代を安くなさんとするが、即忠臣なり。忠臣も、良臣も、君につくすの心は同じけれど、たゞろの境遇の異なるによりて、其爲す所も、自、異ならざるを得ず。蘇東坡の言に、水到れば渠をなすとありけるが、げにや、治世の能臣、亂世の姦雄と、曹孟德を評せる言も、能く其當を得たるものにして、能臣となり、姦雄となるも、たゞろの處する世の異なるに因るのみ。

人の境遇には順あり、逆あり。富貴にして志を得るは、順境なり、貧賤にして志を得ざるは逆境なり。順境にして忠臣となり、孝子となること、既に容易のことにあらず、まして、逆境にあるものをや。時春にして、草木ひとしく榮ゆるも、霜雪至りて、松柏の節始めて現はる。されど古人も、世亂れて、英雄あらはると云ひけん、治世には英雄なしとの意にはあらず。唯順境にありては大奸反て忠の如く、小人、盛德を衒へども、一旦、生死の巷にのぞみ、利害の岐路に及びて、忠邪わかる、治にありて亂を忘れずと云ひけむ、定まりなき世の中に、人はたとひ順境に處するも、逆境の事を忘るべからず。逆境に處する心掛を以て、順境に處しなば、その行、いよ〳〵全かるべきなり。さればとて、國家昏亂せざれば、忠臣たる能はず、一家貧窮に陷らざれば、孝子たる能はずと誤解する事なかれ。順逆共に忠たり、孝たるべし。而して、逆境はことに人の迷ひ易き所なれば、平生、よく貞婦孝女の傳をよみて、心に銘し置くべきことにこそ。

こゝに說き出さんとする賢婦、松田左近の妻は尼子經久の女なり。子ありけれども、はやくうせぬ。永祿年

中、毛利元就、出雲を伐ち、其の先鋒をして、島根郡なる白鹿城を圍み、礦夫等を數多やりて、城壁を穿たしめたり。松田一族、力をつくして固く拒ぎ守る事數月、元就之を拔くことを得ざりき。されど城中水かれて、將士等大に窮して、城を出で丶降るもの多し。元就謀をめぐらし、降人に諭して、連署をつくり、鰐淵寺の僧和多坊、及び左近の季子常福寺につきて、城中にいはしめて曰く、一族みな降參せば、本領を故の如くにせんと。常福寺の西堂等之を聞きて大に悦び、左近兄弟につげて、降らん事をす丶めぬ。こ丶に於て將士等と商儀をせしに、さらば降らんと云ふものぞ多く、また固く守りて死せんと云ふものもまれにはありて、商儀定まらざりき。

時に左近の妻、涙を流して云ふやう、先つ日、元就我が兄晴久と和して、かたくたがはざる事を約したり、しかるに、のち幾何もなくして、再び戈をまじへて戰ひいどみぬ。前車の覆るは、後車の誡めとすべきなり。今か丶る事を云ひて、我等をして降參させんは、たやすくおとさんとの計略にて、必ずいつはりにやあらん。卿等よく〳〵智慮をめぐらし玉はじ、また思ふ處やあらん。去んらと欲するものは去りね。妾は、もと、おろかなる婦女の身なれど、おめ〳〵と敵に降りて、辱めをうくるに忍びず、力のかぎり拒ぎで、よし叶はずた天命とあきらめ此の城を枕にして、此の城の土となり祖考の恩に報ぜんのみと云ひけるに、人々誠に道理なりとて、皆涙を流してこの說に同意し、使者をばかへしたり。

元就は志のうばうべからざるを知り、いよ〳〵固く攻め圍み、降者を擊つものは、刑を加へんとの令を下して、盡く生虜を放ちたるに、其の計略のあたりて、城中此の事を傳へ聞きて、此の夜逃げ去るもの過半、明日、元就方には、たゞ一面の逃げ路をあけてき、二

がより合せ圍みて、大に火をはなちてせめたてたり。松田の一族は力をつくして戰ひけれども、食乏しく、人少く、遂に叶はずして悉く城中に討死したり。あはれ、此の時、もし、將士等をして妻女の節に感じ、一同必死を極めて戰ひなば、敵をしりぞくる事を得しやもはかり難きに、恥を知るもの少く、多く敵に降りて、能く死するの時を知りたる誠の士の少かりしぞくやしかりし。さるにても、よく元就の姦計を看破して、從容死に就き、つゆ家名をはづかしめざりしは、さすがは、尼子氏の女にして、逆境にありて、よく武家の妻女の面目をたもちたるものと云ひつべし。

井上孝子

高田宇太郎

我が皇國の女子には、一種勝れたる美しき特質ありて存せり。今、こゝろみに、古よりの史に據りて考ふるも、支那、西洋などの女子に比ぶるに、いとゞ優れることあるも、いさゝか劣れることなきは、まことに明なり。かの、古來、數多の貞女、烈婦、賢母、良妻などいふが如きは、やがて、その美質の顯れたるものに外ならずして、みな、後世末代の師表たらざるはなし、然るに、維新このかた、所謂敎育といふもの、盛に行はるゝに至りては、いかなる故にや、却りて、一般の德操は、廢れに廢れて、輕佻浮華競ひれこり、聞くさへ忌はしきことのみぞ多くなり行くめる、かゝる風潮の中にも、いともうれしきは世に移なる賢婦ありて、一方に、閃々たる光明を放ち、女子本分を全うしけること是なり。予、今、その略傳を左に掲げて、我が國女子の美質の、未、全く泯びずして存せるを示し、あはせて、世の孃達の龜鑑に供へんとす。あはれ。をことなく咎めたまひそ。

さて、その賢婦を、誰とかなす。曰く、井上孝子ぬ

し是なり。孝子ぬしは、京都の人なり。父は、井上武敬といひて、舊幕府の庶士、母は、土肥氏にして、彌子といふ。孝子ぬしは、慶應元年五月、二條城西の自邸にうまれ、はじめの名を、喜美江といひ、後、孝子とあらたむ。兄弟四人ありしが、二弟の外、みな、早く死りき。父は、剛毅嚴正の丈夫にして、母は、柔和淡泊の賢母なれど、一家五人、よく相協和して、最、善良なる家庭を形成りしことは、知る人の、ひとしく認識せるところなり。而して、孝子ぬしは、その性、穎悟、かつ、温厚にして、而も、この良家庭に成長りしかど、幼より、學の業を好み、六歳にして、小學に入り、その後、父母の都合によりて、兩三回、轉學せしも、終始、品行、學力、ともに、首位を占め、褒賞にあづかりしこと、數ふるに遑あらず。されど、十二歳の時、即、明治十年四月、俊秀の廉を以て、府の選拔するところとなり、官費生として、京都府高等女學校に入れられたりき。蓋、當時の制規とて、十四歳以上ならでは、入學することを得ざりしに、この異例の特選に中りしこと、稀有の榮譽なれと、みな人、いたく稱贊したりき。

かゝれど、こゝにても、操行は、もとより、學問、技藝、ともに、常に、群に秀で、衆に超えたりけれど、たゞに、學友の敬愛せしのみならず、教の官だち、いづれも、善き手はりかなとて、こよなう褒め稱へ、級長、あるは、舍長などいふ譽ある任を囑せられきといふ。かくても、猶、いそしみ勵みしかど、月に就り、年に將み、やがて、螢雪の功空しからず、學の業を卒へしは、明治十三年十月にて、この時、年わづかに十五歳なりき。なべて、世の普通の女子は、いさゝかにても、才學ありとだにいへど、男子にも、口あかせじとまで搆ふるが如き類れはかるに、孝子ぬしは、人の賞むるも、稱ふるも、恰、知らざるもの丶如くとして、

煩しも、かゝる忌はしき氣はひなきは、更にもいはず、僻〻愼みて、萬つゝましうもてなせど、いよ〳〵感じて、げに古の紫女も、かくやありけんと語り合ひきとぞ。

しかるに、孝子ぬしは、猶、小成なりとして、少も安んせず、一个年の練習科といふをさへ修め了りしかば、これよりは、そを、實地に活用させやとて、出でては、兒童教育の任を受け、入りては、父母を助け、二弟を勵して、酒掃薪水の勞は、更にもいはず、あらゆる家政に盡瘁したりき。當時その家は、固より、貧しといふにはあらねども、又意の如くならざることも少からざりしが、孝子ぬしは、甲斐々々しく、一身に引受けて、その理め成し、且、ひたすら、孝養を盡し一家の交際より、一身の交際に至るまで、見にくからぬほどになし〻など、その間の經營苦辛は、人の知るまじきこととなれど、誠に、感泣に堪へざるもの多かりきとぞ。次弟宜文ぬし、今は、美術工藝家を以て世に知られ、三弟敬道ぬし、師範學校の業を卒ふるに至りしも、孝子ぬしが内助の功に基くといふ。

その、職を、小學校に奉ずること十三年五个月、終始、一日の如く、躬は儉素を旨として、決して、華飾を用ゐず、常に、着實にして眞摯、視聽言動、みな、禮にあらざるはなし。而も、卑屈に陷らず、口言ふところは、行、かならず之と伴ひたりき。かくして、まづ、衆生の儀範となり、きはめて熱心に、きはめて懇篤に從事したりしかど、子女の懷き從ふさま、慈母に對ふが如く、從ひて、その進歩、大に見るべきものあり。されど、父兄の信任、はた、同僚の敬愛も、また、一方ならざりき。而して、かく、内外に、大任を帶ぶるかたはら、講學の念、はなはだ切にして、世の進歩に後れんことを恐れ、少しく閑あれど、寒暑晝夜の別なく、孜々として研精し、かつて、寸陰を徒にせず、或

は、國典を究め、或は、漢籍を繙き、或は倫理、或は、音樂、或は數學に、研究講習を積み、或は、外人につきて、幼兒開誘法を學びしなど、一々、枚擧に遑なきほどなりき。その詠み出づる歌、作り成す文、いづれもめでからぬはなく、はた、かきならす小琴の調さへぞ、人にすぐれて、いとゞ妙なりける。

又、慈善のこと、公共のわざに、志あつく、或は、盲啞の不幸をあはれみ、或は、水害震災をいたみて、屢、金品を惠み、或は、學校維持のために、或は、女子興風のために、はた、戰時恤兵のために、率先して、奔走盡力せしなどのこと、亦、尠からざれども、今は、その大概を擧ぐるのみなり。宜なるかな。やうやく。その名は、世につたはり、政府の、これを賞せしこと、實に、數回におよべるは。ことに、明治二十三年四月二十七日、皇后陛下の、京都府高等女學校に行啓せさせたまひし時の如きは、特に、拜謁を仰付けられたりき。いかに、譽榮のきはみにあらずや。又、こゝかしこの學校よりは、辭を厚うし、優待、これを招聘せんとするもの少からざりしかど、匪石匪席の心、容易に轉ずべからず、常にいふやう、妾は、身、不才にして、今の人々の如く、氣輕にものし能はざるを慨むと、この一語、げに、深長ならずや。また、以てその性行の一班をうかゞふに足るべし。又、しきりに、婚を求むるものありしも、父母は、最愛の、唯一人の女子のことなれば、たやすくは、得やらず、もとより、孝心ふかき孝子ぬしなれば、わが意のまに〳〵從ひて過ぎ來しが、二親も、後には、覺る所やありけん、いつまで、かくてあるべきにあらずといひ出し、孝子ぬしも、亦、このまゝにては、女子の本分を盡さゞるなりとて大阪商船會社なる合田藤兵衛ぬしが、切なる望にまかせ、いよ〳〵、合卺の禮を擧げしは、昨二十八年四月の事なりき。この時、はじめて、兒童敎育の任を辭

したりしが、その、梭を擲するにわたりて、畢梭、ふかく惜みて已まず、金品を贈りて、多年の勤勞をなぐさめ、おはせて、賀意を表し、可憐の少女等は、暗涙の中に、感恩狀をものして、これを謝せり。その德望の、いかに高かりしかは、こを見ても、知るに餘あらん。

これより後は、專、良人につかへて、忠貞の心を盡し、聽從の實を致し、關雎の樂、長にして、一家の慶福限知られざらんとせしに、いかなる世のまがごとぞ、今年の春二月のはじめより、かりそめの病に打臥してありしが、二十日あまり八日にいたり、俄に重りて、翌二十九日午後七時、つひに、歸らぬ旅路につきぬ。時に、芳紀、方に三十。一族の悲は、いふも更なり、識ると、識らざると、みな、悼惜せざるはなかりき。三月二日、懇なる儀式を以て、長良の墓地に葬り、法號を、學修院智譽孝道禪定尼といふ。鳴呼、いたましきかな。斯る人にして、天、壽をかさず、はかなしといはんも愚なれや。然りといへども、その志を成し、範を、後世に垂るゝに至りては、未だ、遺憾なし。孝子ぬし、それ瞑せんか。

右掲ぐるところは、實に、その梗概に過ぎざれども、世の孃達、請ふ。よく清鑒するところあれ。予、素より、不敏といへども、多年、心交を受けて、その性事を詳にす。よりて、妄に、一言を弄して、未、知らざる人に告げんとすること、かくの如し。



いけ花（十七）

桃に麥の穗

田邊和氣子

砂鉢に活るには、時としては、體を離して、活分にする事あり。桃にかぎらず、何花も同じ。

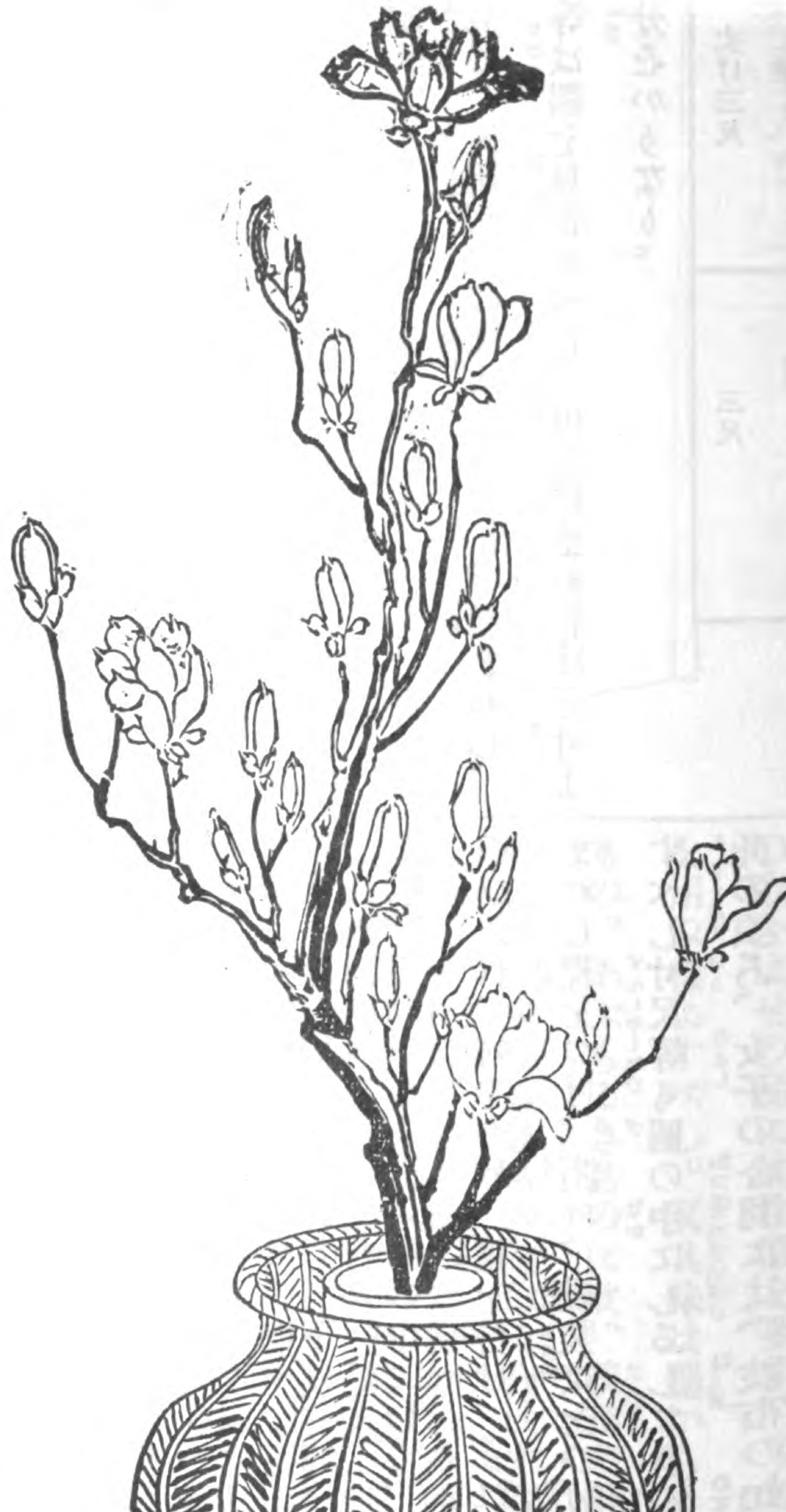
さて桃は、柳の如く、木質和らかなれど、活るにやすきものなり。眞副を例の如く定めて、桃にて眞副斗りを活てよし。但し眞の前の方に、體なくては、恰好あしきものなれど、小枝をさして例よりは、横へ出ざる樣體の心持をすべし。

離して活る體の麥は、三本又は五本を見斗ひ、これも體斗りの活方なれど、其中にて心斗りの、眞副體の容ちを見る樣にすべし。桃の眞副を麥の穗の體と、枝葉差支ざるやうにし、一瓶の中にて、眞副體を見する法なり。



目蓮一種

目蓮は、特に木質もろく、少しもため直す事かたし。されどたゞ其枝の恰好により。眞副體を見定めてよし。



副の下へは、つぼみ抔出ざる樣にし、又花數も、かぞへて、半數にすべし。花瓶は籠にかぎらず、薄ばた、廣口、瀬戸、何にても用ひてよし。又體に、他の花を用ゆるもよし。椿、麥、杜若、など相當なりとす。

此花は花の付所枝ぶりとも、活るにかたきものなれど、多くの中よりぬき出で求むべし。例の事なれど、

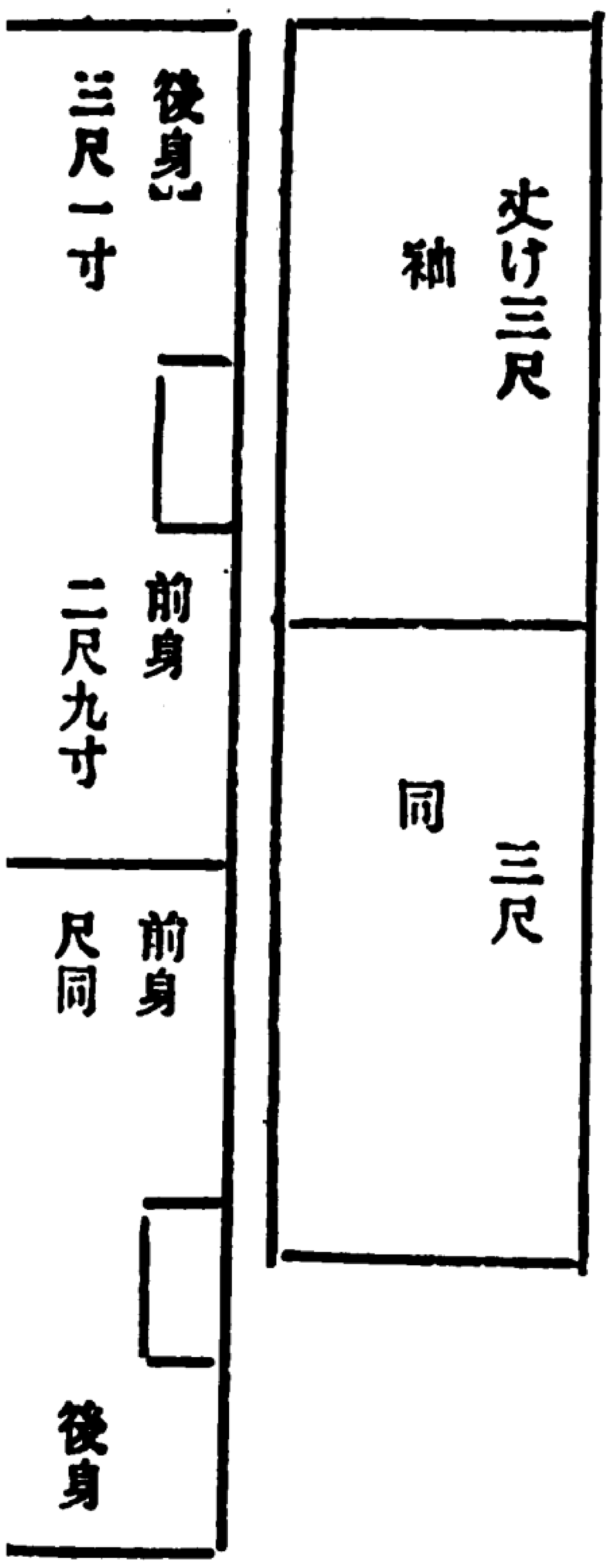
たちぬひ

西山たい子

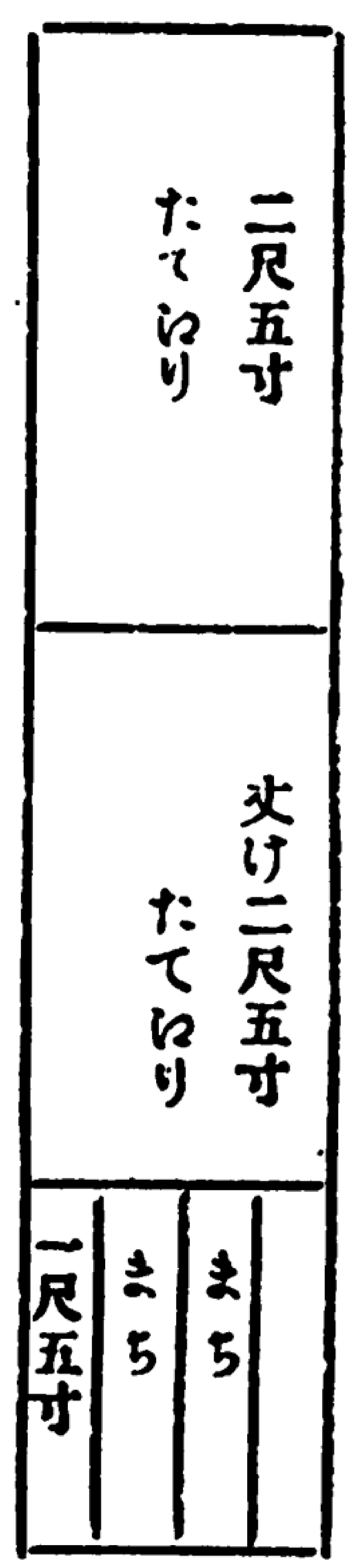
(卅三)半合羽の裁ち方

まづ、兩袖をとりて、身衣のぬひ上りの丈をはかりて、竪襟の丈を定め、上まへ、下まへともとり、また襠のたけをもはかりてとり、殘りを身衣とすべし。裏はみかへりを見て、入用だけの尺にとるべし。襟まわし、及び寸尺等は圖を見合すべし。但し襟まわしは三寸より三寸五分ばかりなり。

半合羽裁ち



方圖

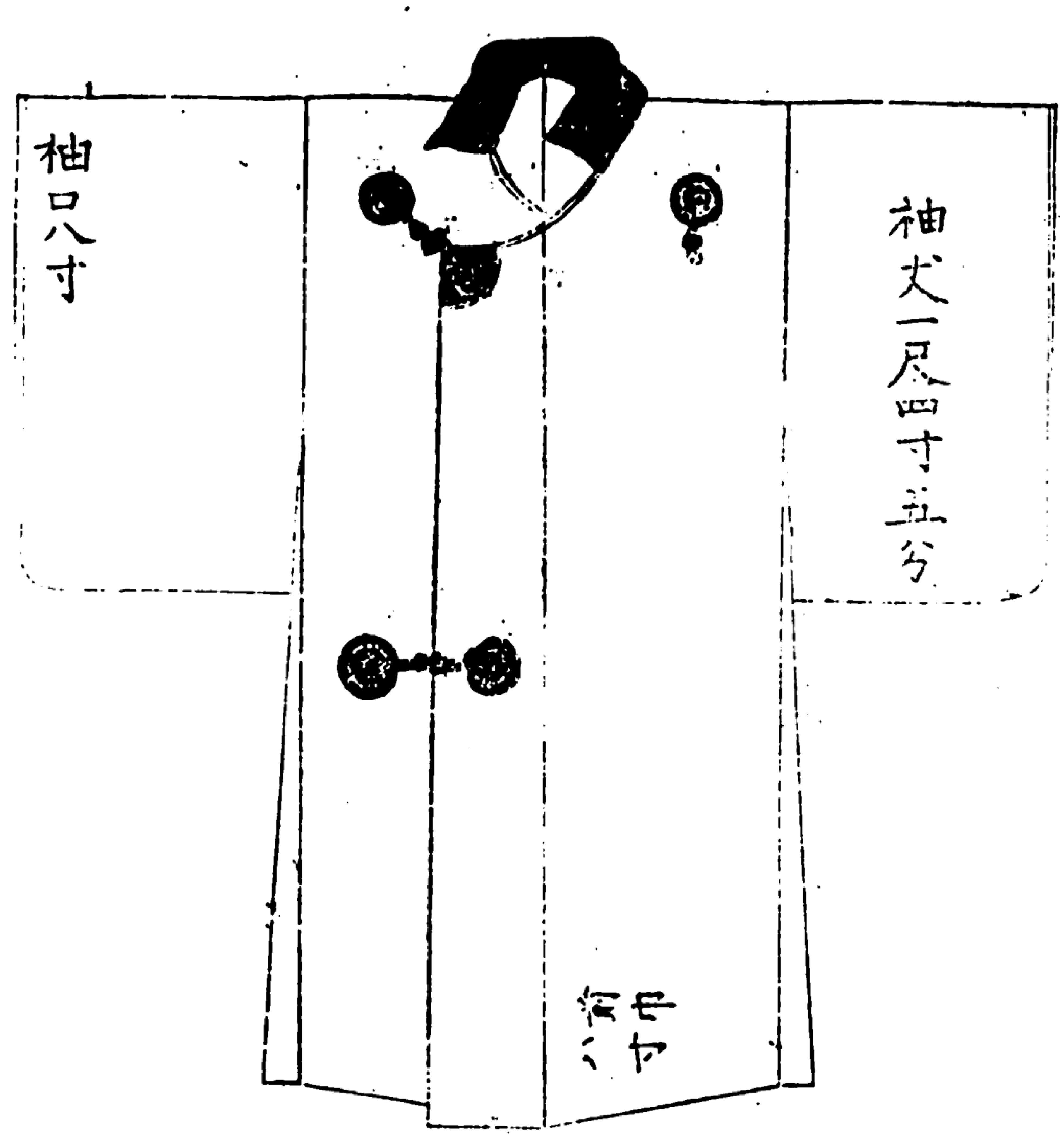


(卅四)その縫ひ方

まづ袖を四つ縫ひにぬひ、袖下を少しぬひわけ置き。さて、身衣のぬひ上りのたけをはかりて、胴裏をはぎ、前下りを羽織の如くにして下げ、四つ縫ひに脊縫ひをなし。襠のさきを五六分の巾にして、袖下にはさみ。ぬひ入れて襠をつけ、袖を付け、それより竪襟と及びまわし襟をつけ、絎け、襟裝束をつけるべし圖を見合すべし寸尺等も圖の中にしるしおきぬ。

此の頃ろ、女子の合羽には、被布の如きがはやりぬ。それは前巾を羽織の如く、襟方より直にぬふなり。襟まわりは大方五寸ばかりなり。

半合羽縫ひ上りの圖



ゆき一尺七寸五分　衿巾四寸　襟巾二寸
袖巾九寸　後巾八寸五分　丈け二尺六寸
前下り一寸

だいどころ

○取合はせの品には注意を要す。すべて同じ形同じ色を用ぬ様にすべし。又其味は鹽からきものには、甘きもの、あぶらこきものには、淡薄の野菜抔、にはきものには、やはらきものを取り合はす等注意すべし。眼に美しと見せ、口に食して飽かしめぬこと肝要なり。

○料理は鹽梅肝要なれども、切方、仕ざま、盛方、器物等に注意せねば、折角の鹽梅を害ふなり。多くの場合に視官は味官に代るものと知るべし。

○味の配合は前にも言へることにて、例へば本汁厚味なれば向皿はかろきもの、あつもの二なれば一つは厚味にし、一は淡味にし、又菜五種なれば、二種は厚味にし、三種は淡味にする類なり。

○魚類を燒くには肉の方を前に燒き、皮の方を後に燒

くべし。

○鳥類を燒くには、皮を前きに燒き、肉の方を後にすべし。しからざれど肉ちゞみて體裁よろしからず。

○煑、又は燒きたる魚類は丸のまゝなれど、頭を左に腹を前にして盛るべし。切身の魚は皮の方を下にして盛るべし。

○砂糖のアクを去るには、砂糖三百目に鷄卵壹個の割にて、其白身を砂糖に投じ、よく攪きまぜ水をよき程に加へて火にかけ、其の沸騰したる時、ふきあがりたる泡をとり去り、絹漉にてこすなり。かくすれどアクぬきの砂糖蜜出來るなり。

○蕨のアクをぬくには、先其根を切り、桶に入て灰を掛け、熱湯を注て、二三時間れくなり。桶より出して能く洗ひ湯でゝ用ゆるときは、アク氣無く、やはらかなるなり。

○筍のゑからきを去るには、之を湯でんとするとき、丸の儘、唐辛を入べし。

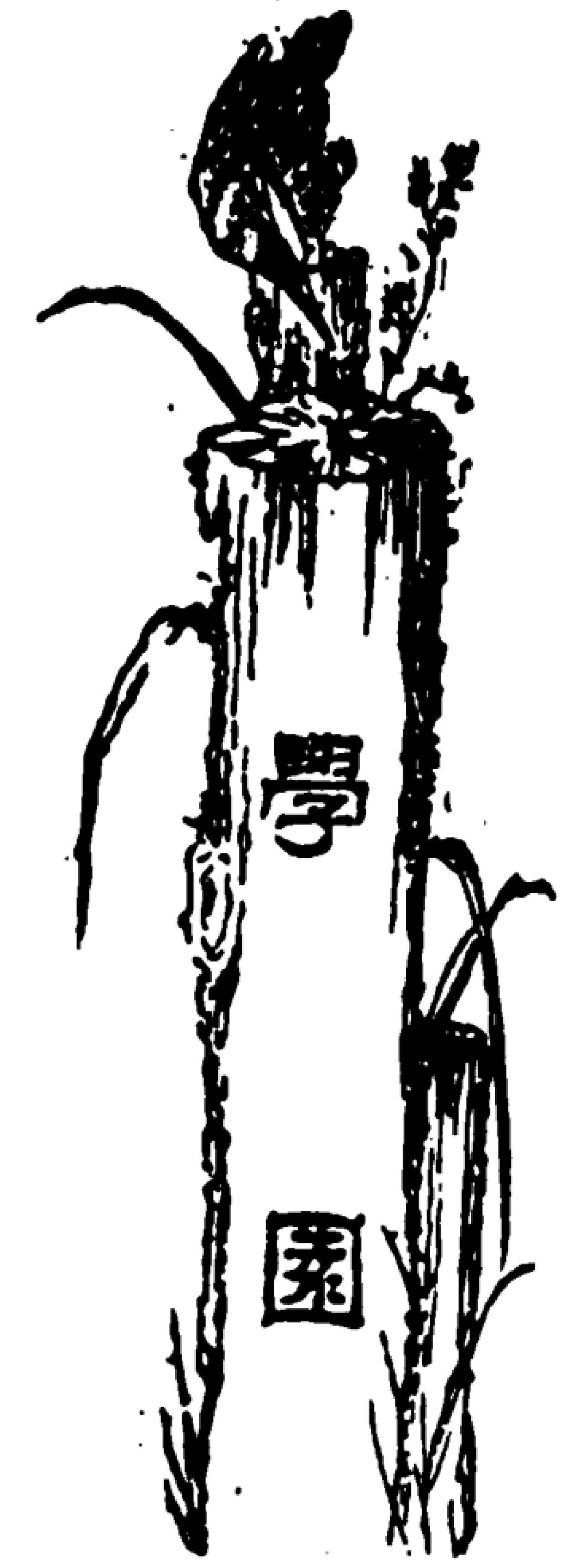
○煑たる鷄卵を殼ともに輪ぎりにするには、湯の中に酢少量を加へて湯でるなり。但し之を切るときは庖刀にも酢を付くべし。

○鷄卵の善惡を知るには、食鹽三十匁を投じたる水五六合を盛りたる器に之を投ずべし。かくして沈むものは上品なり。中程に在るは中品なり。上に浮あがりたるは、腐敗たるものと知るべし。

○油を煮立つるにあたり、之に火の入りたるときは、何にても青物を其中に投すれど、火は直に消るなり。水など注けば反りて火をつよくし、大事に至るべし。

○當節の野菜

筍、細根、だいこん、茗荷たけ、うど、ね芋、根三葉、はうれん草、からし菜、あさつき、わけぎ、さやゑん豆、の類なるべし。



日本文典（十）

塩井正男

前回には、動詞の語尾の變ずる有様、やがて、動詞の活用の有様の中にて、四段の活用と上二段の活用との二種を述べたり。こたびは、その次に、下二段の活用といふものを述ぶべし。

（三）　下二段の活用

動詞が、下二段に活くといふは、動詞の語尾が、五十音の圖の五段（阿の段、以の段、宇の段、衣の段、於の段）の中の下の方なる衣の段と宇の段との二段にのみ變化して、その他は、上二段の所にもいへる如く、「る」と「れ」といふ語を添へるなり。例へば「消ゆ」といふ語を見るに、此の語は、

消え、　消ゆ、　消ゆる　消ゆれ

といふやうに變化す。「き」が語根の如くにて、その語尾が「え」と「ゆ」とに變化す。他の「消ゆる」「消ゆれ」といふやうなる所にては、殊更に語尾の變化するものにあらずして、「消ゆ」の下に「る」と「れ」とを添へるのみなり。故に全く語尾の變ずるは、唯「え」と「ゆ」との二段なり。「え」は五十音の五段の中の第四段にて、衣の段の音なり。「ゆ」は第三段にて宇の段の音なり。第四段なる衣の段なれど五段の中の下の方なり。故に下二段に變化するといふ所より、下二段の活用といふなり。上二段と異る所は、上二段の方は、五段の中の下の方なる衣の段宇の段の二段にあらずして、五段の中の上の方なる以の段宇の段の二段に活くなり。前回を今一度引きあはせ見られよ。

此の活用の法に從ふ動詞、やがて、此のやうなる有樣に、其の語尾を變じゆく動詞の一ッ二ッをあぐれば、

得(え)	う	うる	うれ
受け	受く	受くる	受くれ
痩せ	やす	やする	やすれ
捨て	すつ	すつる	すつれ
いね	いぬ	いぬる	いぬれ
添へ	添ふ	添ふる	添ふれ
納め	納む	納むる	納むれ
絶え	絶ゆ	絶ゆる	絶ゆれ
晴れ	晴る	晴るゝ	晴るれ
植ゑ	植う	植うる	植うれ

などいふ如き類にて、皆五段の中の衣の段宇の段の二段に活きたり。

詞といふものは、無形の音聲のことなれど、ともすれば、變りも訛りも亂れも爲し易きものにて、此の掟に從ひて、昔は必ずいひ來れる動詞にても、今は、他の規則に從ひて、活用する如くなりたるあり。例へば、「受く」といふ語なり。「物を受く」。といふやうにいふべき所を、今の俗語には「物を受ける。」といふやうにいひ、又「物を受くれば悦ぶ」といふべき所を今の俗語には「物を受ければ悦ぶ」といふやうにいひ、さながら、「受け、受く、受くる、受くれ、」といふやうに下二段の活用に從はずして、「受け、受ける、受けれ」といふやうに下一段の活用ともいふべきやうなる詞となれり。これ詞の訛りて變じ來れるなり。下一段の活用といふ事はやがて、後に述ぶべし。

次には、一段の活用にて、これにも上と下との二種あり。

(四) 上一段の活用

すべて一段の活用といふは、此の類の動詞は、其の語尾の活くさまが、單に一段のみにして、他の場合には、

二段の活用と仝樣に「る」と「れ」とを添へるのみなるものなり。換言すれど、此の類の動詞は其の語尾の變じも動きもせぬものなり。

上一段に活くといふ方は、五十音の五段の中にて、單に上の方なる以の段のみに活きて例へど、

[illegible]

着(き)	きる	きれ
射(い)	いる	いれ
着(き)	きる	きれ
似(に)	にる	にれ
干(ひ)	ひる	ひれ
見(み)	みる	みれ
居(ゐ)	ゐる	ゐれ

といふやうに、唯「き」のみにて、「く」とも「け」とも語尾の變ずることあらず。「きる」「きれ」といふやうなる所も、其の「き」の下に、「る」と「れ」とを添へたるのみなり而して、其の「き」といふ音は、五段の中の上の方なる以段なり。故に、かゝる類の動詞は、上一段の活用言といふなり。

此の類に屬せる動詞は、五十音の十行の中にて、ア、カ、ナ、ハ、マ、ワの六行にのみにて、サ、タ、ヤ、ラの四行には無し。かつ、此の類に屬せるものは、極めて少し。一二の例をあぐれど、

の如きものなり。皆、必きとかみとかいふ一段のみにて、くともむとも變化せず、活用せぬものなり。故に一段の活用といふなり。また、皆、斯く五段の中の上の方なる以段のみなれど、上一段といふなり。

（五）下一段の活用

これは、上一段と、大体は仝じ様なるものなれど、唯、此の活用にては、五段の中の上の方なる以の段の一段にあらずして、五段の中の下の方なる衣の段の一段のみなるものなれど、下一段と事わけていへるなり。例へど「蹴る」といふ語を見よ。

蹴(け)、　ける、　けれ、

の如く唯「十」といふ一段のみにて、「蹴る、蹴れ」は、其の下に「る」「れ」を添ふるのみなり。「け」のみにて「き」とも「く」とも變化も働きもせず。故に一段といふ。且つ五段の中の下の方なる一段のみなれど下一段といふなり。此の類に屬せるものは、極めて僅にして、唯、右にあげたる「蹴る」の外には

ね(殆)　ねる　ねれ

へ(綜)　へる　へれ

などいふ古語あるあり。唯、彼の「受け、受く、受くる、受くれ、」といふやふに、もとは下二段に活くべき語が、訛りて、

受け　受ける　受けれ

といふやうに下一段に活くかのやうに成れるが、これに似たるやうなれど、もと訛りあやまれるものにて、

こゝに述べ來れる五種の活用が、規則正しき方にて、この活用のいづれかの法に從うて語尾の活くものは、規則動詞或は正格動詞なり。次には語尾の變化即ち活用の、斯く正しからざる變格の活用につきていはむ。變格にも四通りあり。

(一)　加行變格

これは唯「來」の一種のみにて、其の語尾の變化しゆくさまは

こ(來)、　き、　く、　くる、　くれ、

といふ樣に變化して「き、く、くる、くれ、」と活く所は、正格の上二段の活用に似たれど、別になほ「こ」と活くを得るが、變格たる所なり。

(二)　左行變格

この變格は、爲め(す)といふ詞と、います(坐)といふ詞との二個のみにて、

といふやうに五段に活き」、し、す、する、すれ」といふあたりは、正格の上二段の活用に似たれど、更に「せ」といふやうに活く事が、異る所にて、また前の加行變格とも異るは、加行變格にては、こといひて五十音の五段の末の於の段に活きたるが、これは、やゝ異りて第四の段よ「せ」と活けり。かく異る故に、別に左行變格とて、取り立てゝいふなり。

漫録

なみだ草　（承前）

堀田璋左右寄贈
京極忠高女作

あに君もろの日のとまりでちやくといふ所までうち送り給ひて、又の日夕つけて歸給ふ。道々萬の事を御らんじなぐさみて、御心よげにれはします。いとめやすき事になんとかたり給ふ。この君たち中ころ又たぐひなきはらからにて、おとなび給ふまゝに、かたみにあはれとかぎりなく思ひかはして、とし月はれやてしぬなりてはでくみ給ひしを、俄にひき別給ひて、心細くさうぐしと兄君の思ひくし給ふもことわりに、いとはしくなん有ける。此たび御供に下せしれうはの母なこゝにもありて同じ心に慰めがたう思ひむせびけるをさうれもふらん。此君のいとやん事なくさだまり給ひて道々もあまたの人々つきそたがひ奉り、なのめならず思ひかしづき給ふべき人の待れはするをだにさしあたりて、名殘かなしさはいはんかたなく、心もをさめられぬぞかし。ましてかれが身にてはいかに悲しく思ふらんと、あはれに心苦し。これのみにもあらず、此度御供にこをやりしれやはいづれか愚なるべき。こゆゑの闇は同じ心にころと思ひやらるゝ。

かはらじよ高き賤しき人のれやの
　子ゆゑのやみにまよふこゝろは

夜の明、日の暮るにもまぎるゝ事なく、つれ〴〵なるまゝに、いとし戀しくなでりかなしさもいやまさりて、涙のみ盡ぬを、我ながら思ひわけなく口惜き心にもあるかな。身にまさる物なしとかきてすてたるためしもあるに、況やこれは願ても有べき事かは。人も輕々しく心つきなしと思ふらん。いかにも今一度みるよもなくてやは有べき。とざまかうざまに我心を慰めかねて、あけ暮すに、冬も末にぞ成行まゝに、嵐烈しく木々の梢も物さびて、何となき人つらもかなしかるべき空のけしきを、まして物思ふ身にはいとゞとりかさねつゝ、ひねもすにながめ暮して、旅の空のみ覺束なく思ひやらるゝ。我も古へ此道を一度二度こゑしかど、野山のけしきもいとゞよう思ひ出らるゝに、くたり(給ふ)編者らんありさまもまみる心地して思ひやらるゝ。

こがらしの吹くにつけても旅の空
　いかにとむかり思ひやるかな

十二月二十日ごろに江戸より飛脚上りて、道々事ゆゑなく下り玉ふて、此十日になん屋敷には着き玉ひし。北の御方御喜かぎりなくて、道々へも日毎に御むかひの人々奉り玉ふて、いとやん事なく御供の人々まで、いみじうもてはやさせ玉ふときくは、いと嬉くて、此程の胸少あきたる心地してなん。よろづの事さしあたりたるやうにはおしもあかぬ業なれど、忘るゝとはなけれども、年の暮には事しげくなにくれと急ぎたつ。物騒がしきにまぎれつゝ過行程に、年も暮れぬ。いつしか年立かへるあしたの空のけしき名殘なく曇らね長閑さには、かずならぬ墻根の内だに雪間の若草色つき初めて、けしき立霞に木の芽もうち煙り改まるしるしにや、人の心ものびらかに、ありさまども花やかにて、のゝめき渡るを、ましてこなたには、此君御爲嬉しき

年の初なれど、猶世の常に事そへつゝ、壽ぎのかずかず
祝事どももしてそはれあへり。物騒しき事ども過して、
のどやかなるまゝに、いにし春この君のこなたにれは
して、いとらうがはしくあそびのとするならへにぎは
しく遊びたはれ玉ひしに、思ひかけず。今年は東の春
を待ね玉ひてことさらにうつくしう思ふやうなる事ふ
きをいかでかりめてたくれかしからん、と思ひやるに
も、春や昔のと、まづかこたれて戀しうなん。

あら玉の年たつ日より戀しきは
　ふるすを出し鶯の聲
思ひやる心使はあづま路を
　ひにいくたびか行歸るらん
かずめたし春や昔と忍びても
　かひなき物を春(東の誤か)路の空
れもはずよ雲井のよそに別つゝ
　れもかげぞかり身にぞねんとは

むさし野やみどりをこめて若草の
　もね出る春のはぞに床しき
かくてむ月十日頃にもなりね。この君の御れくりにく
だせしれい人江戸よりのぼりつきぬいかにとした待け
るに嬉しくて、まづ此御事きかまほし、道のほども思
ひの外にれとなしく心安く下りつき玉ふ。北の御方な
のめならず待喜び玉ひて、いとかぎりもなくもてかし
づき玉ふ。さふらふ人々もこの君のきように美しくれ
はしますを、めづらしうめもあやに見奉るけしきにな
ん。此君もあなたの御母上にいとよくなづき玉ひて、
思ふやうにめやすき御ありさまにてぞ。ゑゆりんの君
もいそぎ渡り玉ひて、此君にたいめんせさせ玉ひて、
いとうつくしうらうたし、と覺してそろかにし玉ふま
しきよしかへすがへすきこえ給ふ。めのともろのまゝめ
し出て御あたり近く仕うまつりなれつゝ、あけくれよ
のことなく、上下の人々此君の御かしづきをあつかひ、

草にて玩ひ玉ふ。物思ひしらぬ心にも思しにはすぎて、有かたきまで目出度御幸にこそ、と細かに語るを聞く、心うれしなども、中〳〵いふばかりなし。わさも〳〵心ゆきたる御けしきともしるく、ことさらにつくり出たるやうに、めでたく嬉しき御有樣なれど、心おちゐていと嬉しく、此日頃とざまかうざまに、おぼつかなく思ひむせびぬる胸の内も涼しく成たる心地して、そなたに向て拜み奉る。かくてむ月も末になりゆけど、空のけはいものどやかに、春めきて軒端の梅もけしきばみ、吹來る風も匂ひふかく、墻根の若草萌出て丶、四方の梢も霞渡りて、長き日の徒然なるまゝに、れい人よびすゑて、かしこの物語道々の御有樣など語らせて慰む、明暮さかしき事のみの給ひて、御供の人々もかしらふりてをぢあへり。道すがら見奉る、人毎におないつくしと目を止めて見奉りしなど語るを、さぞあらんかし。我心の闇ならでも有らず、なてとなき道行人もいみじくなかしき御有樣を見知けるにや、と思ふにも、涙ぞ落つる。下り玉ひし時道にて別れ奉りし心の内など、語り出ても唯今の心地して、いとゞ戀しくなん。

忘じよ此のよの外に成ぬとも
　わりてもわかれし人のおもかげ

たち別れ又もみぬめのうら浪に
　ぬるゝ袂のかわくまぞなき

思ひきや道こそあらめ明（昨の誤か）編者云日けふ
　同じ世ながらわかるべしとは

よの常に人は見るらんうき身には
　ためしあらじとおもふ別を

中々にさらぬ別れの道ならで
　身をうきさまに思ひたへまし

いつこゐてあふ坂山の岩清水
　わかで別れしかげをみるべき

ながらへは年をふるともみわの山
　二葉の杉のたかきしるしを

あふ事を命にかけてまつ嶋の
あまのもしほ火身もこがれつゝ

たもへどもおはずの森の露きえは
　このことの葉や形見ならまし

ふみたきしあと見て忍べ濱千鳥
　なき別れにし夜半のむかしを

（をはり）

あさせのしるべ（承前）

故人　藤井高尚

貧すれどどんする

閑夜物がたりに、時世うつろひて、れば、おとろへぬれど、こゝろは心としてことならず。わろびたることどもいでくるわざなりといひけんやうに、とめるほどは心かしこく世に孔明か張良かなどいひはやされし人、世にふるたつきまでなくなりては、からでのみはおちじと思ふより、去ひたるわざどもなすからに、なしねずしてまどひさわぐを、**かたへの人見てはわらひ**ぐさとぞすなる。されど人はおの家わざをよくつとめて、いさゝかも身のほどにすぎたる事せず、年のくれからがへさだむること、からではと思ひしるこゝろを、つねにわすれずして、まづしくならざらんやうに、すべきことなりけり。鳥けだものだにもほどくにたのがくふべきものをたくはへたきて、なきをりにさわぎまどはぬもあるぞかし。いたくまづしくしては、めにちかき朝ゆふの見ぐるしさを、とかくせんとするに、心のいとまなくて、よろづのことに心たそくはけくしうなるものぞかし。心なほからぬは、いつはりもいひならひ、人のものかりてかへさぬやうの道ならぬこともすなれど、まづしくなるぞかり、わろきことはなし。

まるをがくもんするひとの、ふみよむにのみ心をいれて、世にふるわざのかしこからで、まづしくなるよきことのやうにから人のいへるにならひて、こゝにもさやうなるひとはむるを、こゝろたかきことゝすなるは、いみじきひがことなり。がくもんしつゝも、世のわざをなのめにおもはぬぞ人の道にありける。

短氣はそんき

人はものねんじして、のどやかなるぞことわざしげき世にふれて、にくげなることいひかへる人のありて、めざましう心やましと、おもふしありとも、おもてにあらはさず、見しらぬさまして、その人をうとみてたりぬべし。なまはらたちやすく、おもひのまゝにいひもしなしもしては、すこし心のをさまりて、くやしうおもふことぞおほかるべき。ねぢけがましからでも、いときふるのどめたる所なきは、よからぬ人ぞかし。さては人をも身をもそこなひぬべし。またものまなぶ人のふみ見るも、巻の數おほくて、おもしろからぬをねんじつゝよめるよきことのあるを、心みじかく見さしてやみては、いたづらごと、なりぬべし。

長きものにはまかれよ

身のほどをおもひはからで、いきほひいかめしき人にかたんとするは、おれものゝしわざぞ。たれもおよそじこゝろつよしや、などほめたてられて、いさみすゝみつゝあらそふとすれど、ちからおよばねど、はてはては身をも家をもほろぼすぞかし。されど心にかなはぬことありとも、いきほひいみじき人にはまけて、世にしたがひたらんぞよろしかるべき。

論語よみのろんごしらず

くすしは人にむかひては、ものくふことなどつねに心してよきほどにくへ、あしきものなくひそ、といさむれど、みづからさやうにせざれど、いでやくすしは言のみぞよきとやうにいひつゝ、そのいさめをとがめて、

きく人まれなり。すべて何にまれその道の人は、つねのことくなりぬるからに、なほざりにおもひて、人にいひきかすばかり、みづからはつゝしまぬぞおほかりける。うたよむ人はものがたりぶみをよくよみて、中むかしの人のものゝあはれをしれるさま、みやびたるこゝろばへを見しりて、ならひうつさんとし、つとびごころをいみきらひて、かりそめにもなさけおくれたるわざ、いやしきふるまひなさでこそ、むかしのうたのふかきあはれをも見しるべく、みづからもほど〳〵にあはれなるうたをば、よみいづべけれ。さるをこのごろのうたよみの、いにしへ人のこゝろのみやびをばおもはず、歌のふりは中むかしによるをも、こゝろひきゝやうに思ひて、それよりもあがりたる世のにとものすなるは、たとへば、いやしき人にかふりうへのきぬきせて、かしつきすゑたらんやうなることにて、いかでかよろしからん。

一寸の虫にも五分のたましひ

おろかなるも、いやしきも、人といふものは、こゝろざしおもふすぢありて、あなづりがたきものにしあれば、めしつかふものにも、ほど〳〵にこゝろおくべきことになん。かやつなでふことかあらんと、おもひあなづりては、あやまることおほかるべし。

人にはそひて見よ

かりそめにまじはりては、よきやうなる人もへだてなくむつびかはしては、おもひのほかにあしきあり。にくきおもやうにて、つひいづることばてはしく〳〵、なつかしげなき人の、そのことかのこと、聞おはするに、なさけふかく、たのもしきもあなり。さればよく心とゞめてよしあしを、見しりてうちとけもし、へだてもすべき事なりかし。

へたの長談議

琴笛のたぐひすべて何わざにまれ、今めかしと人のお

もふほどにて、とぢめてのこりゆかしくおもはせまほしきことになん。上手はさる心しらひするを、わるもののゝくせに、かたへの人の心のびやかにあくびうちするをも、しらずてものするをぞかし。

わかきときのしんどはかひてせよ

みやづかへするひとは、さらにもいはず。すべてわかきは、いとかやすくはしりやすきぞよろしかりける。老てはたちゐするも、くるしきものなれど、よろづものうげなるも、つみゆるさるを、わかき人のさやうならんは、人ににくまれて、なりのぼることかたかるべし。

餅はもち屋

なにわざもろの家なる人はかしこかりけり。いかにといふに、ものゝふはいとけなきより、弓ひき馬にのることをならひ、くすしの家にはをさなき子も薬の名をきゝおぼゆるがごとく、おのづからなれてしることの多かるに、おのがわざとこゝろにしめて、ちからをつくしなしたらんには、いかでかはおろかなるべき。されどよろづのわざもろの家なる人のすぐれたるによりて、ならふべきことになん。

かべにみゝあり

世の人ぎゝにいだすまじきことは、ほのゝさくとも、また人にはひそかにもいはぬぞよろしかりける。その人はもらさじとおもひて、かたりてもたのみがたきは、人の心にて、また人にかすめいふを、きゝつぎつゝよからぬものどもの、はゝゆがめまねびなしそへ言して、あしざまにことぐしく、いひなどもするぞかし。

眞葛のおうな（つゞき）

瀧澤馬琴

又その消息に、こゝには詞かたきもなく侍れど、只あけくれに物を考へ見かへすることの癖となり、病ともなり侍りたり、さてさてもくやう、何の[illegible]て生じ出づる

ん、妾一人の心として、世界の人のくるしみを助けまはしく思ふは、なしがたきことゝしりながら、只この事を思ふが故に、日夜やすき心もなくて苦むぞ無益なる、**今はやもめにもなりつるに、なけきをのこさんこ**ともなし、いきのかよはん限りは、この歎きやむことわたはじ、なか〳〵生きてくるしまんより、いきをとゞむるぞ苦をやすむるのすみやかなるべしと思ひて、ひたすら死なん事を願ひ侍りしに、時は秋のながき暁かたの夢に

秋の夜のながきためしを引く蔦の。といふ歌の上のをのづからふと聞ゑたるは、多年信じ奉る観音ばさつしめさせ給ふと覚ゑて、夢こゝろに忝く此下のつけやうにて、おのが一世のうらとならんとまでしめさせ給ふとればゑて、いとうれしく心いとわわたゝしきものから、世々に栄ゑんとこそいはめと思ふ程に、さめはて侍りき、四の句いと大事ぞと思ひつゝ、やゝほどありて、たゑぬかつらは、とつけ侍りし

秋の夜のながきためしにひく蔦の
絶ゑぬかつらは世々に栄ゑん

一首のかたちをなしぬれど、いと心もとなくのみ思ひ侍りき、かくたゑず、物をのみ思ひつみし故によりて、病者となり侍りて、身もよはく心もきゑ〳〵にのみなり増さりしは、不動尊を信じ奉りて後、漸病もうすくなり侍りしか共、今に右の手のいたみて、筆取ること心のまゝならず、眼くらくして細書をみる事わたはず、是は老の病とぞ覚ゑ侍る、このちかきわたりに岩不動と申し奉るがたゝせ給ふ、とし毎の五月廿八日には、このわたりなるわらんべ共のつどひて、御こしをかき荷ひ、御はたあまた持ちて遊ぶが如くもて渡り侍り、我も赤色なる御はたをたてまつりしを、御先に持ちてわたりしかど、御心につかせ給へるならめと有りがたく思ひ侍りしに、よひ過ぎてうすねむたき

に、いざねむやと思ひて、はしゐしながら、籠にこめたる螢のやすげなくふるまふをまもりつゝ、何心もなくてありしほどに

ひかりある身こそくるしき思ひなれ、といふことの耳にきかれて、めさむるこゝちせしは、此御佛の御志めしぞと有りがたくて

世にあらはれん時をまつ間はと、又下をつけそへ侍りし、此二歌をちかくに、さらむ心にこめしことどもを書きしるさむやと思ひ立ちて、いとれはけなきこと共をいひ出せるにぞ侍るなる、書き果てゝ後に誰にしらげをたのまむやと、久しう思ひ煩ひて侍りしに、かかる人に見せよと、不動尊の御志めしありし故、そなたさまにことよせ侍りしにこそ、おろそかならず考へを添へ給はらんなんとねんじ奉りぬ、今の此身はたとへむ、小蛇の物に包まれて、死もやらず、生もせず、むなしき思ひのこれるにひとし、君雨となり、風となりて、こゝろざしを引きたすけ給はらむ、もし天に顯るゝことのありもやせんなどありて、これみは瀧澤解大人先生樣御もとへおや子ご書かれたり、この長ふみを見る程にれもはず涙ははふり落ちて、あはれむこゝろになりたり、名をいむ事はからくにの制度なるを、國學などのうへにては、ふかくいむよしもあらず、たとひ今はなべて忌とても、戯號を唱へらるゝには、はるかにましてはいに稱へり、但大人先生などたゞへられしのみ當りがたきことなれむ、大人先生のわけをしるして、かたくとゞめたりけれども、猶おやにくに用ひざりけり、こは藥に懲りしものゝ羹を吹くたぐひならまし、ろも〳〵この眞葛の刀自は、おのこたましひあるものから、をさなきよりの癇症の凝り固まりしにもやわらん、さむれ心ざますなはにて、人わろからぬ性ならずは、予がいひつることどもを速に諾ひて、とはつれやの事をさへしるして見することや

はせん、かゝる婦人のたのめる事を難ひなまんぬ、さすがにてしかじ〳〵とことうけしつる、そのをりの予がかへしに。海なす御こゝろの廣からずは、木の枝に鼻まするゝといひけん如き、予が言ぐさもまうべなひ容れて、しかじ〳〵とは聞え給はじ、れよろはこたみの御せうそこにて、あし曳の山の井のかけさへみゆるこゝちし侍れど、淺くは思ひ侍らねど、不動尊の示現によりてなど聞え給ふむかりうけられね、そはとまれかくもあれ、たのまれ奉りし一條は、よくもわろくもなし果て、おん笑にころ供ふべけれ、去かれどもなりはひの爲に、たのまれたる書きものゝ多かれど、ことしのくれまで待たせ給へなどしるし果て、妹の尼の彌ふみを見るに。みちのくよりのせふろことゞけ奉る、さてもいぬる日ふたゝびまでとぶらひまつりしは、人づてになせろ、みづからゆきてしかじ〳〵と傳へよかしと、みちのくよりいひれこせたりしにこそ、さるをつぎのあしたにもあはせ給はねにて、しか侍りぬ、かのるするのれきなこそ、こゝろにくけれ、かゝれは奥のたより毎に、尼がそのせうろこをもてゆきて、とゝけまゐらするもをうなし、此のちは、いつも使をもてすべきに、うやなしとて御咎め給ひろとおんじたるふみの書きざまなれど、予は何ともろのことのいらへはせで

踏わきて訪れし草のいほりには
なほ春ながくかゝるきみかめ

とよみてつかはしゝかど後のたよりに、かへし萩の尼

やぶしわかぬ君が心し春ならむ
わりこともくさもかれずやあらまし

とありしに又予がかへし

こと草を花とし見れど止めへず
きのふをもみし春はものかは

とよみてつかはしけり、こは卯月朔日のことにぞ有り

けるこの萩の尼、瑞祥院も多く得がたき才女にて、歌をよみ、和文をよくし、はしり書きうるはしくて、手すぢはあねの眞葛に似て、瀧本様なるもめでたし、程へて予がことくきの歌をたヽへて

ことの葉のしげき庵の下つゆや
ふる江のはぎを花となすらん

とよみてれこしたりき又このとしのふゆ萩の尼よりものをつヽみてれこしヽ服紗を、あやまちて火鉢の中へとり落したりけるをわびつヽ、かへしつかはすとて

こがれつヽ渡しかねたる川舟の
風のふくさにいとヾくるしき

といひしに、萩の尼のかへし、やけふくさといふことをはし書きして

よの人の類にあらずまめなりや
。。。。けふくさの戸にかへすこヽろは

とありし、こは予が遣したるかへの服紗をかへせし折の事になん、是より先にやよひのころ、眞葛のせふそこに、れんなりはひの爲に、筆とらせ給ふにて、いとまなきにしぞ〱わづらはし奉るを、こヽろなしとやれもはれ侍りてんなどありしに、かへしすとてよみてつかはしける

解

我宿の花さくころもみちのくの
風のたよりはいとはざりけり

程經て眞葛のかへし

あやまたず君につげなん歸る鴈
霞がくれにことつてしふみ

こはろの家のれきてあれぞ、予にせうろこをれくれることを誰々にもしらせずとか、嚮に聞きたることもあれぞ、歌の心もしられたり。是より後かねて書きつヽりたりし物をぞ、妹の尼に淨書せしめ、又予が爲に、綴れるものをぞ、眞葛のみづから淨書して、くさ〲れ

くりて見やられたり、この程、そのせうそこのはしにも、眞淵、春海、宣長、大平などを論ぜしあり、いとけやけくおもはゆるを、さのみはとてえるしてつくさず、かくいふ程に、このとしもはやえる月になりしかば、獨考のことは忘れ給はずや、かねての約束をたがへ給ふななどいひおこせること、えだく〳〵なれども、今さらにそのふみを引きなほさん事易からず、もしそのわろきを刈りとらば、殘らんことの葉すくなかるべし、こは此のまゝにうちおきて、別にさとすにます事あらじと思ひにければ、原本は假名づかひのたがへるをと眞名の寫しあやまれるに、いさゝか雌黄を施して、別に獨考論二卷を綴りたり、その言つゆばかりも諂ひかざれる筆をもてせず、そが是非をあげつらふに、教訓を旨として、高慢の鼻をひしぎしにぞ、いとおとなげなきわざに似たれど、かくいはでかだばめせば、いよいよさとるよしなくて、にぶしといふとも、予が斧をうけたる甲斐はあらざるべし、人に信をもてするに、いかりを怕れて、諫めざらんは、交遊の義にあらずと、かねておもふによりてなり。かくて廿日ばかりにして、そのふみやうやく來りしかば、みちのくへつかはすとき。いつくまでもまじらひし事うけ給はり度思ひ侍れど、をとこをみなの交りは、かしらの雪を冬の花と見あやまりつゝ、人もや咎めん、且わがなりはひのいとまなきに、とし來思ふよしもあれど、いとふるき友すらうとくなり侍りたり、かゝれば御交りも是を限りとおぼし召されよなどいひつかはしゝに、次のとしの春、みちのくよりのかへしとて、萩の尼の屆けられたり。くだんの尼は、予が論の書きざまを譏れりと見て、うらみにけん、怒りは筆にあらはれにき、こはあねにおとりて、むねせまき婦女子の氣質としられたり。眞葛はさもあらずして、いといたくよろこびうけたるせうそこのまめやかにて、おんいとまなき冬の日に、ふみ

やどものせめ奉る春のまうけのわざをすらよそにして、かうなか〳〵しきことをつゞりて、をしへ導き給はせし、御こゝろの程あらはれて、限りもなき幸にこそ侍れ、なほながき世に此のめぐみをかへし奉るべしと書かれたり。このとき越前のさくにがみとて、貢物には絶ゑてなき小がたの美の紙、十五帖とおなじ國のはさみ、みちのく名とり川なるうもれ木の栞、もとあらの萩の筆などを贈られしにぞ、明の春きさらきの頃、そのよろこびを一ふで書きてつかはしゝに、かしこのかへしは來にたれど、粂路の橋のなか絶ゑて、ふみ見ることはなくなりぬ、いとかなしともかなしかりしが、かく遠ざかりぬる事を、いかにぞやと思ふ人の爲には、いふもゑうなきわざながら、彼同胞は才女なり、齢はかれも小動のいそぢを過ぐる程なりとも、互におもてをしらずて親しみ、としをかさねなど李の下に冠を正し、瓜の園に履をいるゝ人の疑なからずやは。且彼家のぬしにはしらさでみそかにすといはるゝをしりつゝ、交るべくもあらず、いと捨てがたき思ひありて、捨てずしてかなはねはすくせありての事ならんと、かねてよりおもひしなり。これよりの後、まどろまぬ曉毎に思ひ出で、そのあけの朝、せうそこさへとり出しつゝ見る毎に、なみだに胸はみちしほの、ふかきなげきとなりにたり、このゝちみとせばかりの程は、萩の尼が御宰をもて、予が家の奇應丸を求めさせつる事、をり〳〵有しとむすめどものいひつるにて、扨は予が安否のほどをなみちのくへ告げんとてのわざかと思ふも、いとはかりなし、いかでわれ眞葛の草子をゑりまきにして、世にあらはさんとは思へども、彼の獨考は禁忌に觸るゝこと多かり、まいて予が獨考論などは、人に見すべきものにはあらず、されど此二書はそゞろになん人に貸しそと、興繼をすらいましめたり。又奥州ばなしなどいふものも、はゞかるべきことまじりたれど、ね

もなきにはなしがたし、只礎すたひの一書のみ、その文の特にすぐれて、且めずらかなる説もあり、禁忌にふるゝこともなければど、是をこそとおもふ物から、いまだ時の至らぬにや、ふみやと謀るいとまなかりき。

眞葛の齢を僂るに、予に四ぞかりのあねなりけれど、今もなほ恙なくぞ、六そぢあまり三つにやならまし。おもふにいぬる文化のはじめつかた尾藩の某氏の後室が、新潟といふ草紙物語を書きつめて、予が筆削を乞ひけるも、かたく辞びて還したり、又ちかきころ、本郷なる田中氏の女の、予が教へを受けんと願ふこと、既に十とせにあまりぬと聞ねしも、いなみて終にうけ引かざりき、まいて男子の予がをしへ子たらんと請ひし人々は、かゞなふに遑なきを、意見を述べ推し禁めて、いづれもゝとめに應せざりけり。予が人の師とならざりしは、柳宗元に倣ふにあらねど、素より思ふよしあれぞなり。さるを只この眞葛の刀自のみ婦女子にはいとにけなき、經濟のうへを論ぜしは、紫女、清氏にも立ちまさりて、男たましひあるのみならず、世の人はねぞしらぬ、予をよくしれるも、あやしからずや、されど予が陽に袪けて、陰に愛ずるは、このゆゑのみ。かゝる世に稀なる刀自なるを、兎園社友にしらせんとて、いといひがたきことをすら、おしもつゝまでしるすになん、秋もはやけふのみとくれゆく窓の片あかり、風さへいとゞ身にしみて火ともす程をまつまゝに、かくなん思ひつゞけゝる

から見きと思もわびし眞葛葉に
ひともなぞりの秋のゆふかせ

予は例のふみやらにせめられて、かゝるものかくいとまなきを、そのいとまなき折に、いと長々しう書かんこと、まことにかくにはあるべけれど、思ふも老のしはみたるなり、瘤を見するに似て、われながらいとゞ〳〵をかし、されどきのふ巳のころにはじめ

て、筆を把りしより、さて書くとかく程に、夜もはや二更の鐘を聞きつゝ、このはたひらを綴り果にき、もちろ初稿のまゝにしあれど、さすがに心もとなさに、今朝はじめよりよみかへして、纔に誤脱を補ふものから、拙きうへになほ拙きが、巧にしてけふのまとゐの間にあはぬには、ますらめと、みづからゆるすも嗚呼なるべし

文政八年乙酉冬十月朔　愚山人解稿

大湊の烈女

清水濱臣

去年のことなりしとかや、伊勢國度會郡、山田の里より、二見の浦への道に、大湊と云ふ所あり、こゝにて、をとめの一人して、男三人までそこなひたることありき、其の故よしをとひ聞くに、此のほとりに一人のものゝふ有り、はやくつかへし君に、いさゝか勘當からぶりていとまたまはりけれど、ふたゝび主といたゞくかたもなくて、かろけき烟を立てつゝ、春秋をおくりむかへけるに、むすめひとりもたりけり、かほかたち、かいなでにはこよなくまさりにけり、十といひて、六つなゝつにやなりにけん、をさなきほどより、大かたのをんなにかはりて、太刀とるわざに心を入れたりき、されど男を思ふ心はかはらざりけん、いつのほどよりか、とかくいふをとこ有りて、人しれずむつまじうなりにけり、はじめの程こそありけれ、此の男いとたはれたる本性にて、こゝかしこにかゝづらふかた多く、此の女をつひのよすがとも思ひとまらざりけれど、女心、かろく身をまかせたることゝくいなげきけり。父はさることありともしらで思ふやう、われこそかくうもれたれ、むすめをだに、いかで宮づかへにいでたゝせて、人めかしくあらせばやと思ふに某殿に今參りをもとめ給ふなりと、つゝのかすものあり、むすめとも

かくといふに、むすめもよき事と思ひて、うけがひぬ。さて、わたくし男にあひて、いふやう、父のの給ふによりて、某殿に、つかへたてまつらんとす、わ君の心、みづからを妻と思ひさだめ給ふさまにもあらず、みづからもいたゞく君いで來ては、身を心にもまかせねど、有りし契りは夢と思ひさまして、御心にかなひたらん御よすがをも、さだめ給へといへど、男もさいはいの事とや思ひけん、まことしかりとて、離縁をわたすとかいひけん、神世のしわざをまねびにけり。かくて女は殿に參りたるに、よろづのわざにかしこく、心まめ〳〵しくつかへ奉りければ、殿をはじめ奉り、御かた〴〵利口ものにまつはし給ひけり。此の殿に、廿に一つふたつあまり給へる若子君おはすが、此の女の心ざしのまめやかに、すがたのにからぬをめで給ひて、いかでそひぶしにとおぼしければ、うち〳〵にの給ふことと有りけり、女、數ならぬ身のやごとなき御具とは、いかでかはならん、ふえうなることゝ、いくたびかいなみ聞えしを、本意におぼしつめて、父の方へ申したまはしけり。父は身にあまるかたじけなさに、女をよびとりて、いかで御心にはしたがひ奉らぬぞ、この身のなりいづる時ならずや、をんなは氏なくてとかいふことわざもある物をと、さとしけるにしばらくさしうつぶきてゐたりしが、父にむかひて、の給ふ事げにことわりなり、何をかつゝみ聞ゆべき、父の御めをしのびて、わたくしをとこせしことと有り、其の罪さりどころなきはいかゝはせん、男の心いとあさくてくやしきことたびかさなりしかど、契りをたえて、かたみにおのがよゝにはかけはなれ侍り、かくて後、殿へは參りたれど、の給ふごとく、おほせごとにしたがひ奉りて、こともなきことながら、わたくし男有りしことを、父にも聞え參らせず、殿もしろしめさず、さるを今めしつかひ給ひて後、うしろきよからぬ名の

ほころび聞えなば、いとたい〴〵しきことならじやは、かゝれば父にも此の事聞え奉り、父より此のよし殿に申しわけ給ひて、さてもなほ御心に思ひ捨て給はぬえにし侍らば、心よくうけがひ參らすべしと思ひ侍りてなん、此の事あらはに聞え侍るは、いとくるしかれどもたしあへでなんといふに、父もことわりと思ひ、殿に聞え參らせたりければ、うしろぎたなからぬ心のいとぞゆかしくおぼして、とく參らすべしとの給ひければ、父はよろこびて家にかへる、すなはち、うからにもいひしらせけり、彼の男子にもかくすべきならねば、女よりしていはせけり。男、心に思ふに、まこと、互に思ひたえて、さるかたのしるしふみをさへ、とりかはしつることなれば、今さらにうらむべきふしもあらず、さころいへ、はじめはわが物となしたる女を、目に見す〳〵人の花とよりにみんも心よからぬ事なり、又思へば、彼の殿の若子君とやらんには、はやくより心をかはしてや有りけん、さてわれをば中たえたるならん、われを類少しと思ひあなづりて、にぎはゝしきに思ひつゝ。一向心なるわかうど二人をかたらひて、其の夜父の、家になき程をうかゞひて、女をぬすみ出だしてけり。女こゝろをあはせたることならねば、とかくあらかへど、きゝもいれず、しひてとらひ來て、大湊に率て來て、三人心をあはせて、けしからぬわざせんとしけり、一人はうしろよりつといだかひ、ひとりは足をとらへてをり、彼の男すゝみよりて、無理なるすさびせんとするを、女こゝろをさだめて、やをらおさへられたる手をふりはなち、男のはきたる太刀を、むかひざまに引きぬきて、打ちかけたるに、高名のかぢやうちたりけん、男一太刀にたふれぬ、やがてうしろざまにかへへたる、一人のわきばらをつきとほしければ、これも一聲さけびしまゝにてしにぬ、足とらへたる一人は、是におぢてにげんとしたるを、おもひざ

まに、屁だふらをえたゝかにきりさけたれど、つひににげうせぬ。女はたち返りて、打ちなしたる二人に、とゞめの刀さしつらぬきたるほど、父はせつきてけれど、はじめをはりの事聞えて、今は何をか聞え参らせんといふまゝに、みづから高むなさかをつらぬきぬ。父もたゞものならざりけれど、ことわりなり、かくこそあらまほしけれ、よろづよきにはからはん、心な殘いそといひながら、女のかうべ打ちおとしぬ、すなはち、所のつかさにうたへたてまつりて、申すやう、女はおのれが子にてはべれど、おほやけのおんさだめをも、まちきこえたてまつらず、心にまかせて、かうべうちおとし侍りしおこたり、おほやけの御のりのまゝによりて、おのれをもつみなひたまへ、露うらみ奉らずと、おめたるさまもなく聞えあげければ、つかさ人たち、とかくかうがへさだめ給ひて、いましに罪なし、とかくのさたあるまじきなりとて、女のなきからは、父にたまひて、とかくのわざいとなませさせたまひぬ。此のよしつたへ聞き給ひて、殿にはいとゞをしみ給ひて、あとのこと、ねんごろにいとなむべしとて、こがねどもあまたゝまひぬ。父のはじめの志を聞えしよりも、こたびの事によりて、ふたゝびめしつかひさせ給ひて、昔のまゝのろくたまはりてけり、此の烈女のことをはめさせ給ひて、津の君より、大湊に石ぶみ立てゝ、ことのゆゑよし、くはしくしるしつげさせ給へりけりとぞ。こゝには、山田人のかたりきかせしまゝをしるしぬ。おのれ、山田に有りし頃にて、大湊までは程もとほからぬ所なるを、尋ね見ざりし事、かへす〴〵もくやしかりき　（游京漫錄）

道灌山のすゞろありき　　わかば

年久しう御身とならびてありかざりき、今日は何處へ

かつれだゝんと、從弟女なる人の來りて、そゝのかすに、井の内の蛙の、大海原にいづるも驚くことのみ多くして心地もまどひぬべし。ゆるし玉へと云へば、わなさらば、などて、先きつ日姉上の御子たちと淺草へは行き玉ひし。よきは、ひとり御身の同胞の子にのみおつらなし玉ひて、親御の同胞の子にはうすらし玉へ。さるが世の中の道ぞかしと恨むる言の葉のをかしきに、流石にいなみかねて、さらぬ人のうちつどふ都大路をあとにして、道灌山のほとりへものせんと云へば、蛙の宿へなの花の黄なるなど見に行かんは、よく〳〵のつきあひかなど、しぶ〳〵うべなひぬ。三人づれはわろしとて、嫂のとゞまらんとするをば、いなとよ、己、小蝶とつれだてば三人づれにはあらじとて、しひて誘ひ出したる快よさ。誰に仇をかへしたるにや、我ながらをかし。やがて田畝の間を過ぎて、道灌山へ出でしが、いつか、これにしむかしの道を忘れて、ふみ迷ひたる折しも、蝶の二つ三つひら〳〵と、とび來り、また飛びゆくに、我を導くかと見るも心つからにや。見玉へ、わらはが云ひし如く、路づれは四人となりしにあらずやなどうちたはむれつゝ、此方彼方蝶を先きだてゝまがり行くに、まがう方もあらず、見覺ゑある畠の中に出でぬ。なの花は大方種子となりはてゝ、香りもなし。思ひ出でたる道を彼方にくねりて、櫻桃などのある方へ出でけるに、花は殘りなくちりはてゝ、青葉ばかりしげけれど、むかしの香の忍ばれてしばし立ちやすらひたり。かくて山を下りて田の方へ行くに、道の邊なる蛙の、都の人にれそれてか、水ににげ入るもをかし。咲きのこりたるれんげ、すみれ、今はまた糸にぬがんとも思はぬよなど思ふ折しも、

ふりつもる雲とも見ゑて卯の花の
　匂ふ垣根はすゞしかりけり

と嫂なる人のよみいださるゝに、ふと彼方の里を見れ

ば、けに卯の花の盛りにして、賤の垣根にさきこぼれたり。むかしは我もたゞ白雪とのみながめんを、今日はみな白髪と見ゆるは、賤がまがきもとしふりしにや**あらんなどうち笑ひぬるを、側にすゝみ居たる賤の女た**ちが、鍬をとゞめて、ながめらるゝもいとはづかし。此方は大方すきはてし田の多きやうなれど、彼方にはまだ男女うちまじりて、いろしげにすきつゝ、かへしつするさま、身にしみて覺えけれど、

今日もまたすきくらすらん少女子が
すげの小笠に月のさすまで

げに粒々辛苦といはんも、事ふりにたれど、此の少女たちに誰がためにいろしむにや。君がためとは云へ、知らず〳〵我等は、此の人々のめぐみをうくるなりけり。さて、己は何をもて報いんとすらん。爲すこともなくして、徒に暖に着、飽くまで食ふ身ころ、里の少女にも劣りて、恥かしきことの限りなれなど思ひつゞくる程に、日は、はや西に傾きけれど、くれぬほどにとて、いろぎてもとの道へとかへしぬ。

躑躅

草の屋主人

木立ち枝振り姿は、ひなびて、いやしげに、見どころとてはあらねども、躑躅は、紅に眞白に、花のあくまでにはやかなるが、心深う情けもありげにればえて、あはれなり。されど、いにしへの人も、

わきも子が紅ぞめの色を見て
なづさはれぬる岩つゝじかな

などといひて、にほやかなる花の色を、ゆかしきものにめでられぬ。

岡のべ、山のべに、むら〳〵とさきつゞきたるは、朝日夕日は、一きは照りまさると見え、げに、むかしに、

日をさふると山のみねのつゞし原

立てるかげは花のいろかも

といひ、

入日さす夕ぐれなゐの色はへて

山下てらすいはつゝじかな

といひけるも、さこそありけめ。松かげの夕日てりまさり、山の下路てろ輝くまでに、咲きたるも、はなやかにうつくしかれど、谷川の岸の岩が根などにすがりて、ちしはの色ふく見ゆるは、何の思ひの、かくはいはで色に出づらむと思はれてかなしく、峯ふきおろす風に亂れさやぐ青葉がくれに、こゝかしこもゆるばかりに咲けるは、何の思ひをたきてかともればねていとやさし。すべて、遠く見たらむがあはれなれど、近くも、春雨のあした、露にしなへてにほへるも艶なり。都の名所には、日暮の里の花見寺、大久保の躑躅、この頃や盛りならむ。

野寺の墓

（る）

石榑青苔

内には俄かにかしましく、いかにしけむ、かみつくごとく、口きたなく叱りつくるとひとしく、したゝかにうつ聲、ともにきこゆる金一が叫び、雪子はあるにもあられず、いとしの子や、いかにさる事ありとても、さまでひどくうち給はずともの事、いかにわが子にあらねばとて、などさまでにはおはすらむ、情なや、つれなや、嘸や痛からむ、年はもゆかぬ子をむごらしう、よくもさることのなるものかなと、悲しさいはむかたなく、こぼるゝ涙のみこみつゝ、火ともして、衾かへしてまゐらせむと、いひながらわける子つとひきよせて、目に角立て、聲するどく、いかなれどこの短夜にと、いひも終らず寝衣かゝけて、つよくかきひねれど、ひゝと聲たて、遂には泣音もかすかにおとろへ

て、ひき入る斗なるに、中々になくにもまさる思ひ、目をとぢて口の内に、堪忍せよや金一、さぞ邪見なる母と思はむも、いつまで母を慕ふもせんなきこと、ことにあまりのなされ方に腹立しく、一つはすまぬ事なれば、見せつけにせめさいなみしぞかしと身をふるはしぬ。さすがに母は見るにも見かねて抱きとり、とかくなだむるやうなり。これをきく勝藏は、おのれいよいよくさりをりしよな、いかに過ちあればとて、幼なき子を教へはせずて、責むるにも程こそあれ、われを忘れて、みさをゝかへむとする證據ぞと、飛立ちて入らむとする折も折、あはれ、いかに爲にする事なればとて、吾ながらさまではよくもしつるよと思ふに、今となりては之堪へず、わきいづる泪をおさへて、戸おしひらき立いづるは、臺所にいでゝ泣音まぎらさむとにや。勝藏はをどりかゝりて、おのれ薄情ものめ、思ひしれと、のぶかにゑぐる鑿のあと、所かまはずさしつらぬけば、悲鳴をあげて打仆るゝに、父は驚きてけせいでぬ。折しも、月は雲の底よりおぼろに輝きいでたるに、勝藏よな、人殺しよ、人殺しと、必死となりて呼はるにぞ、いでおのれも共にと、入らむとするに、手おひながらも遮る雪子、蹴仆せば又之動かず。とかくする内、近きわたりには打さわぐけしきなれば、さては早逃うせしか、恨みはなほも殘れども、捕へられてうき耻見むより、いでといちはやく走り出たるに、月は又雲に入りて、きこゆるものは、俄にふりいでゝ、軒端にそゝぐむら雨の音のみ。

（を）

ふりそゝぐ雨を物ともせず、いづこをたどり、いづこをあてと思ふ間もなく、足は空をとびてかけ來りけるに、勢つき、息きれ、打仆れて幾時斗經にけむ、心づけば早曉近く、閉こめたる雲の中にも、明けむとするさまゑるし。見れば、吾は衣ゑとゞにぬれそぼ

ち、泥さへいたくまみれたり。こゝはいづこぞ、早苗うゑたる處、半植ゑたる處などある小田、こゝかしこに小さき木ども生こもりて、一目千里の廣野、さてはうれしや、見とがめられもせずて、はるかなる田舍に來にけり。さてもこゝはいづこの國ぞ、東すべきか、西すべきかと、右視左視れど、こはいまだ澁谷の果、さては、われは右衞門の家、われは權藏の住居、こはかうしてはをられず、とはいへ夜はあけわたりぬ、今うろ〳〵とかくてありかど、あやしまれて逃のびし心もあだ、まて暫し、かの草寺に入りて、けふをぞ過さむと、いそぎ立入りて、さま〴〵に思廻せど、つゆまどろまれず、くさ〴〵の思ひは、胸も破る斗なり。あゝ、いかにくさりはてる女なりとて、人を殺せど、われも亦死なねどならず、其上心のかはりしものを、あゝ、おろかなる事してけり、われはなどかく淺はかなりしぞなど、心はいよ〳〵迫りて、堪がたし。さはいへ、たゞ女一人の爲に、獄屋の中にうき年月をふる身とならむも口をしく、わが面はいよ〳〵たゝず、さるのみか、もとは妻なれど、今は緣もゆかりもなき身、必ず死罪にとはれなむを、いづれかくてはあられぬ身なれど、それよ、自ら手を下すがまだしもなりと、思ひ定めぬ。寺とはいへど名のみにて、いつ誰かたむけしか、しきみの葉もかれはてゝ、いとさびしげに、佛さへたゞわづかに二つ三つ重ねあげたる石なるのみ。雨ふれどぬれ、風ふけど壁やぶれ、軒傾くも、しかもつくらふ人なし。あたりは里の子やつどひけむ、半面などちりみたれ、紙もてつくれる鎧やうのもの重なれり。さては芝居の眞似などせしにや、打たゆたひてあらむには、子どもらに見出られむ、さては、さては、こゝも安き處にあらず。罪あるものは、佛も護り給はぬと見ゑたりと、立あがりて見れど、寺の横手に大木こもりて、中に池あり、幾百年の間、千とせの松の鏡

となりにけむ、今は水草れひとぢて、池の心もわかず、靑やかに生わたれるが、水に生ふる菱、からはねなどなるによりて、下ゆく水のありとはしらる。いと淺きが如くなれど、其まはりの廣けれど、深さも思ひやらる。あはれ、わが身ををさむるれくつきはてゝ。

二三日を經て、この池よりかきわけられたる屍は、雪子に深傷おはせつる勝藏のと定まり、官廳にては、引取方を七兵衛にれふせつれど、今は子にもあらずとて、うけがはず。せむかたなく、其野寺のかたへに假に埋めて、去るしの木たてたれど、永く詣づる人もなく、あはれとかたる人もなし。

雪子は三月斗の後に全くをさまりけるが、それより後は人いつも笑める姿を見ず。後あまたの年を經て、金一の十歳になりし五月某夜老いたる父母とわか子をすてゝ、ゆきし處をしらず。

瘞へて、勝藏の墓にならびて、又一の新しき木のしるしは立てられ、十歲斗の男子、朝な夕なに詣できて、手向くる千種の花の上に、いつも宿れるは、露にやあるらむ、はた何にあるらむ。（をはり）

落花　柴田千稻

第五　叔父御の遺言ぞや

皐月は悲しげに若武者のあとを見送りて、暫しが程は正体なく悲嘆にくれしが、最早や心を決したりけん、涙を打拂ひて頭を擡げ、蒼色めたる顔に落ちかゝる黒髮を後の方に搔いやり、取り亂したる衣を繕ひて、靜に立上りたれど、氣は衰へ力失せ、蹣跚として思はず二歩三歩よろめきしが、漸う柱に縋りて上にあがり、破れたる袋棚より一つの古きつゞらを執出して蓋を開き、兼て秘め置きたる短刀を出して、右手に握り持ち、四邊を打見廻して鞘を掃へて、濁りなき秋水夏も寒く、

眸子を凝してぢつと見詰むれど、忽ち一道の雲氣あり、鍔元より走りて、彩文細やかに尖先にかゝり、はつと吹き出す吐息は二つに摧けて、やつれたる我容貌は其中心に寫れり。皐月は堪へ兼ねてほろりと落す一滴の露、其晃々たる光は忽ち曇りて、恰も水に落しれる紅一點、ろを慌しく拭ひとりて、アヽ父母の我身を護れとて賜はりし此短刀に、自ら此身を殺さんとするは何の因果で。かゝる悲しき目に逢はんとて今日まで存へはせざりしものを、悲しと云はんか口惜と云はんか……………アヽ最早思ふまじ恨むまじ、何を思ひ何を恨む事のあるべきぞ。只親家殿、憐れと思さば我がなき跡に一片の回向を賜はり候へ。一滴の阿伽の水一抹の香火を供へたまはらば、我身には千部萬部の讀經にもまして嬉しう覺え候はん。喃親家殿と顔を打俯せて幾度も袖に目を押拭ひ、やがて其處の片端に端坐して、屍を亂すまじと紐を執りてしかと兩の膝を結び、彼の短刀を逆手にして、兩の眼を瞑し、默然として暫く神氣を鎭むるものゝ如し。

かゝる時表口にぬつと顯れ出でたる二人の鎧武者あり。耳に口を寄せて互に咬き合ひ、俄に躍り入りて、咄嗟女の持ちたる短刀を奪ぎとり、コレハと驚き呆るるをねぢ伏せて、アレーと叫ぶを耳にもせず、其纖手を後に廻し、ヤヽ其方等はと愈々驚きたる女の顔に、ハヽ……………と搖ぐばかりの高笑をくれ、驚きつらん、我等は黒澤入道と山岸坊ぞ、元來爲さつた事もなき手荒い事を遊ばしたも、大した譯のある事ぢや、よう御聞きやれ、今宵其方の叔父御と共に、よき獲物やあると此處彼處捜し廻る内、來たわい一人の小冠者、かゝる事とは露知らず、如何さま由ありげなる出立にて、何をか獨言申し、沼の邊りに腰をおろして、舌打鳴し水を呑居るを、前後より躍り寄りて、だんびら叩いて威したれど、何がさてびくともせず、あまつさへ叔

父御はこれぢや、眞二つぢや、驚いたらう悲しからう、けんども無駄ぢや、死ても生き返ること請合もなく出來ぬ事ぢや、よりて死骸はざんぶと沼の中へ水葬と出掛けた、水烟が此世の御名殘あとは魚の腹の肥料となりやつた、そこで兩人額を集めて談合の上、兎に角其方に知らす事と決め、かくて此處まで參りたるに、扨々驚いた刄物三昧、一歩おそかりせばあたら玉もめちや〳〵ぢやつたわい、そこで又御聞きやれよ、昔より叔父御の志ぢやにより、其方を、ハヽ……其方を金にするのぢや、遊女に賣ると決めたのぢや、いや泣くまい〳〵、これは兼ね〳〵叔父御の申されたる事ぢや、如何に叔父御が死なれたとて、我等其志しを無にするに忍びない、いざ御立ちやれ、參らうず、何參りやらぬとか、何としても參りやらぬとか、どうあつても御立ちやらぬか、何としてもか、どうあつてもか、叔父御の志を無にしてもか、エヽ泣くない、吠ゑるない、ぐづ〳〵と面倒ぢや、引括れと、悲愁も用捨も白眼玉をむき出したる鬼等は、もがき苦しむを事ともせず、刀の紐を解きて其腕を固く縛め、あまつさへ聲立てさせじと口に猿轡を施し、兩人顔見合せて滿々足の高笑を爲して、『まづこれで安心、叔父御も嘸かし草葉の陰で喜んでおじやらう、所で山岸坊、遠き道を此のまゝ脊負ひ行くも大した厄介ぢやて、何とか善き勘考は御ぢやるまいか』、『中々』『おぢやるか』『おぢやるとも〳〵、此胸にはぢんと面白い勘考が滿々としておぢやるて』、『さて〳〵善い胸でおぢやるは、さらば『御話し召れ聞かうわい』『御聞きやれ、こうぢやと、山岸坊は戸棚を押開きて其中をぐる〳〵と打見廻し、諸手を打鳴らして、占めたりこれぢや〳〵と、彼の籃籠を執出して蓋を開き、『何と黒澤入道うまい物がおぢやつたらうがな、此代物を此中へ投入れて、上より蓋をふはりと爲して、細紐できり〳〵と引

緊めてエンヤと背負のぢや、けんどが其背負のはこうぢやて、御身が先に背負へば其次は我身、其次は御身、其次は又御身、亦其次も御身』『何と山岸坊』『いや何御身ではない我身ぢや、其次も又我身ぢや、何と善い勘考でたぢやろうがな』『ハ………大分御鼻が長がうなつておぢやつた、鞍馬山の大天狗もそつちのけでおぢやるは、アハ………』『アハ………と、頬を打て高く笑ひ、又手を打つて高く笑ひ、暫しは笑ひに笑ひしが、やがて黒澤入道は『とんと笑ふて夜が明けさうでおぢやるて、いざ背負ふでは御座るまいか』『されども、背負はよけれど、まづ押入れて御見やれと、殆と死したるが如く、息の根も只細々と通ふぞかりなる皐月の身を、彼の籃籠の中に提げ込みて、上より蓋をかぶせ、苦しうはおぢやれど暫しの辛抱ぢや、これも叔父御の遺言と思ふて恨みやるな、御山を越えて谷越えて、ずんと極樂の所へ連れて行つて進ぜやう程に、御泣きやるな、善い子でおぢやるよと、狂言を吐き散らして、籃籠を四重五重七重八重に卷き緊めて、黒澤入道は其紐を跳り『其許まづ先へ、おしよやれ』、『これは何として、約束が違ふやうでおぢやるぞ、無駄言はやめとして其許こそ先へ』『否其許こそ』『否々遠慮ばしせずとまづ其許より』『さて〳〵面倒ぢや、さらば脊負ふわい、後を賴むぞ今少し持上げておくりやれ、いや之は大分の重量が御座るわいと、入道我を折りて、籃籠の紐を兩の肩に掛け、鼻のもとに千條の皺を集めて、虫毛の如き眉を片寄せ、うん〳〵と唸きつゝ漸う立上り、山岸坊、忘れ物を爲まいぞ、其山太刀を提げておぢやれ、其袴もかゝへておぢやれ、其處に飯櫃がおぢやる、此處に酒壺もおぢやるぞ、ある物は殘さずにさらへておぢやれ、いやはや大分肩が痛うなつておぢやつたわいと、おぼつかなき足を一歩一歩踏みしめて庭におり、蹌踉として鬼の泣面もかくやと





思ふばかりに口を曲げ眼を細め、幾度か肩に手をかけて揺り上げつ。

かくて左に蹌踉き右に蹣跚き、漸くに表口に片足を踏み出して、又後の足を運ばんとする途端、大喝耳を襲きて一閃の電光斜に其首筋を縫へば、入道は俄に悲鳴をあげて、葛籠を負ひたるまゝ仰向樣に堂と倒れぬ。後につきたる山岸坊はアッと膽を消して思はす知らす二三歩飛びひさり、腹の底より絞り出したる聲を放ちて、片手に刄の柄を摧くる計りに握り詰めたれば、其れや顔の色は青菜の如く變りてガタ〳〵と頻りに胴震しつ。

村雲（その三）

白魚女史

むねん、われながら、くちをし。心なき此の身。如何にせば、塵や清められん。汚れやすゝがれん。世にいさぎよき身とやなるらん、いかにせば、思へば〳〵、むねん、くちをし。海山もたゞならぬ父母のふかきめぐみにおひながら、つゆばかりも報いもかへしもまゐらせず。父君は、早う世を去り給ひて、心細くも母樣が身一つ、かよわき御手一つに、よく〳〵いつくしまれ、塵をもすゑじとばかりに、御庭の露、よく〳〵やさしくもうつくしくも、かいなで育てられしものを、いひがひなき此の身は、床しき色をもそへまつらで、なげきをのみかけ奉る愚さ。末の松山は、よしや浪こすとも、二人は必共に老ひよ、人ならで誰にもとかせなと、かたくゆひも結び給ひたるふりわけ髮を、心にはあらねば、いつしかよそにときも亂しもせでは叶はぬやうなりたる身のあさましさ。いづくまでいひがひなきわが身なるらん。しかのみならす、まだ世の中の色にもそまざりし妹を、年齢の病ならんと人の云ふままに、淺はかなる心に、それとのみ思ひこみて、いか

でもとの雫をたづねて、むせぶ思ひの底をわけ、母様の御心を安め、自らもれちつかんと思ひしあまりに、はづかしや、我〱は、袖にさへつゝむべき涙の色をど、たやすくもらして、自らをも耻かしめ、人をもけがし、ましてあどなきものに、あだし心をそへて、遂に同胞の間に垣さへすゑられたるはづかしさ、はしたなき、言ふ甲斐なさ。心におまらん事は、母にこそもらしぬ。心あらぬものに、あだなる心をみだりがはしくは、ゆめなかたりそと、母様が、いつになく、御言葉たけくの給ひしは、よく〱はしたなしと思ぼしめしたれどにやあらん。あなはづかしかりき、はづかしかりき、我ながらはづかし。もしかゝる事、播磨の人のさかれもせど、さぞや、口惜うれとしもいとひもなし給はん。妻にはいかでとればさど、あな何とせん。よく〱はしたなものと思ぼしてか、母様、父君の云ひなづけ玉ひたる背の君松丸主を、いつまでもまてよごはの玉はで、たゞ心深き方、そちゆゑに玉の緒の限りを、むなしくつくさんずるどかりに思ひつめたる人へとのみ仰せらるゝは。

つゝしみなき身のはてはかくぞ。親にまでれどさるゝよどかりに、かきくどきて、かづ子は身も世もなく泣き沈みしが、またふと思ひかへして、勿体なや、勿体なし。母様は、いづくまでも、妾をよかれとのみればしめして、先つ日より、さどかりはの玉ふにこそ。かづ子わづらふな。兩手の花と思ひなぐさむ中の妹が、何を思ひわづらふか、うちしをれゆくを見るに、わが片手の朽ちも枯れもなしゆくやうさへればねて、年浪の、昨日今日とみによりたるは知られてならん。ろちさへがわづらひもせど、母は、此の世にはもはやえあるまじ、母われと思はゞと仰せて涙ぐまれたるれん氣色、思へど、めのまへに、よく〱のれん情け、ろれを思ひもくみもせで、れどしめらるゝなど、かりにも

恨みがましう思ひたる心のあさましさよ。母様、ゆるしてよ。ゆるしてよ、母さま。さても／＼、もくづの身、沈みて、親のなげき、人のうれひの消えゆくものにしあらで、津の國の浪波ならずとも、何處へなりと身をなげてまし。あな、また、かゝる淺はかなる事を思ひ出るよ。かゝるいひがひなき數ならぬ身も、わが子とればさでこそ、ひたすらに幸あれ、ながかれとのみ思ぼす親心、此の頃は御袖のつゆけさを見るにつけても、なほ、母樣に、何に先だたるべき、母さまに。いづくまでも、いつまでも、おはす限りは。妹や、やよ、妹、一日も早う快うなりて母樣の御心をなぐさめ參らせてよ。姉は、いひがひなき姉は、なげきのみかけまゐらすのみの口をしさ。せめて、妹、そなたぞかりは、のう妹。此のほどよりいろ／＼はづかしき事きかせて、さぞや心ぐるしくあさましく思ひてなりけん。ゆるしてよ。あながちにあししとにはあらざりしを、心いたらねど、ゆるしてよ。今更にあはすべき顏もなし。よそながら頼むぞや。こゝよりこそ頼むなれ。頼むぞや、妹、早うようなりて母樣をなぐさめてよ。なぐさめてよ。色には見せじ人には見せじと、姉も思へど、ともすれど、かきくらす袖の時雨、はや色さへかはるやうになりにたり。せめて、妹、そちは、心なき姉に似で。姉に代りて母さまの孝養、くれ／＼もと、ちゞに思ひ亂れて、獨りつく／＼とながむれど、空には迷ふ夕べの霧にむせびつゝ、いづくの浦にあこがれゆく、かなしげなる孤鴈の聲、もの思はるゝ。思はるゝ。忘れがたし、そも忘れられじ、松丸君、すて給ふ君はうらみにあらねど、すてられしわが身が恨めしう、わがみが口をし。浪速の浦のあだなみ、なにの恨みはあらねども、忘られし野中の水こそ恨めしうくちをしきのみ。と思へど、かゝるくちをしき身、いふがひなき身、かゝるかひなきものゆゑに、玉の緒の

たま〳〵世にまうけたまへるに命も、危きまでに思ひ亂れ給ふといふ人も、思へどいとをし。罪えまし此の身。たゞ此の上は、白糸のたきをわびもし、たのみもかけて、身の罪をも拂ひ、人の迷ひもはらさむや、たのむは、たゞ此のたき一すぢのみと、思ひつきたるかづ子は、そのまゝ忍び出でゝ、ほとり近き白糸の瀧、水の音をたよりにたどりつけど、をりふしふきすさぶ山おろしに亂れ狂ふ水すごし。

文林

林新樹　　徳大寺實則

ひと群の松のはやしに咲きかゝる
藤もあを葉にはやなりにけり

夜卯花　　東久世通禧

烏羽玉の夜めにもそれと見ゆる哉
かき根に白く咲ける卯のはな

幽居山吹　　久我建通

世の人は絶えてとひこぬ住ひにも
ところえらぬ山ぶきのはな

山郭公　　高崎正風

ほとゝぎす初音も聞かぬさくら花
尋ねわたりしやまかけにして

故郷山吹　　毛利元徳

人すまであれしまがきの山ぶきの
いはぬ色こそあはれなりけり

山家夏　　鍋島直大

いつのまに夏のけしきになりに劔
見馴しむらもあを葉しげりて

山新樹　　津輕承昭

雲と見しさくらはちりて夏やまの
みねは若葉にうづもれにけり

猫　本多忠貫

なれなれて袂にすかるねこの子は
淋しきときのともとこそなれ

谷新樹　前田利嗣

たに川の水もわか葉に見ゆるまで
岸のこずゑのしげり合にけり

路卯花　長谷信成

夏木たち茂りてくらきみちのへに
ひとむらしろくさける卯の花

夏雨　水野忠敬

れはかたは青葉になりし我が庭の
こずゑすゞしく村さめのふる

海邊郭公　宮地嚴夫

はりまがた月れちかゝるいそ山の
松のこずゑになくほとゝぎす

折蕨　北郷久政

菅の根のながき春日もわすられて
のべの早わらび折すさみつゝ

行路落花　阪正臣

あはれわがゆくさ歸るさ見し花も
大かたちりぬみちしばの上に

曉旅行　植松有經

ゆけどゆけど並木の松の影くらし
宿をたちしや夜ながなりけん

潜水器を見る　大畑弘國

わたつみにしつく玉さへあさるなり
世にうづもるゝ人やなからん

松下禪尼　金子薫園

こぼれては千代の鏡となりにけり
なさけもふかき松のしたつゆ

伊賀局　佐々豊水

すゞしさは松ふく風のおとよりも
君がこゝろのおくにこそあれ

女鑑を愛る人に代りて　宇野豊道

女かゞみ手にとりもちて朝よひに
こゝろをうつし見る人もかな

惜別　諏訪忠元

厂金のたくひとや見んうちひさす
みやこの春にわかれゆくきみ

此頃我海軍てふ軍艦の艤解きに題して　肝付兼行

うなゐらの敎への海のおもにまで
すめらみふねの浮ぶ御代かな

庭卯花　近衛貞子

茂りあふ木立かくれにさきたれど
まかふものなきにはの卯の花

杜新樹　蜂須賀随子

木の間より見えし社をたどるまで
杜のこずゑは繁りあひにけり

夕郭公　鍋島榮子

雨はれしゆふべの月にほとゝぎす
をりにあひても初音なくなり

雨後遠望　前田朗子

あま雲はいつしか晴てわだのはら
夕日うつろふおきのしまやま

夏露　西四辻茂子

朝な朝なおく露見えてなつくさも
はなさくあきぞ近くなりぬる

庭卯花　柳原愛子

つくろはぬ賤が垣ねにさきつゞく
卯つぎのはなのおもしろき哉

首夏藤　小池道子

みつ枝さす片山かけのふぢのはな
さかりながらに木がくれに鳬

春月幽　小倉文子

咲く梅はかすみにきゑし山の端を
かすかに見する春の夜のつき

待郭公　下田歌子

ちぎりてもれかぬもの故はとゝぎす
鳴かぬかぎりはねられざり鳬

夏山　松平健子

薄くこく見ゆるかぎりは青葉にて
なつにもれたる山なかりけり

首夏水　諏訪晴子

うなゐらか親しき友をつどひつゝ
水もてあそぶ夏はきにけり

夏雲　日野西廣子

うちわたす夏野の草にかせたちて
ひとむらいでし空のうきくも

野徑蝶　三島竹子

春の野のすみれつまんと思へども
ねぶれる蝶のゆめやさめなむ

蛙　小笠原艶子

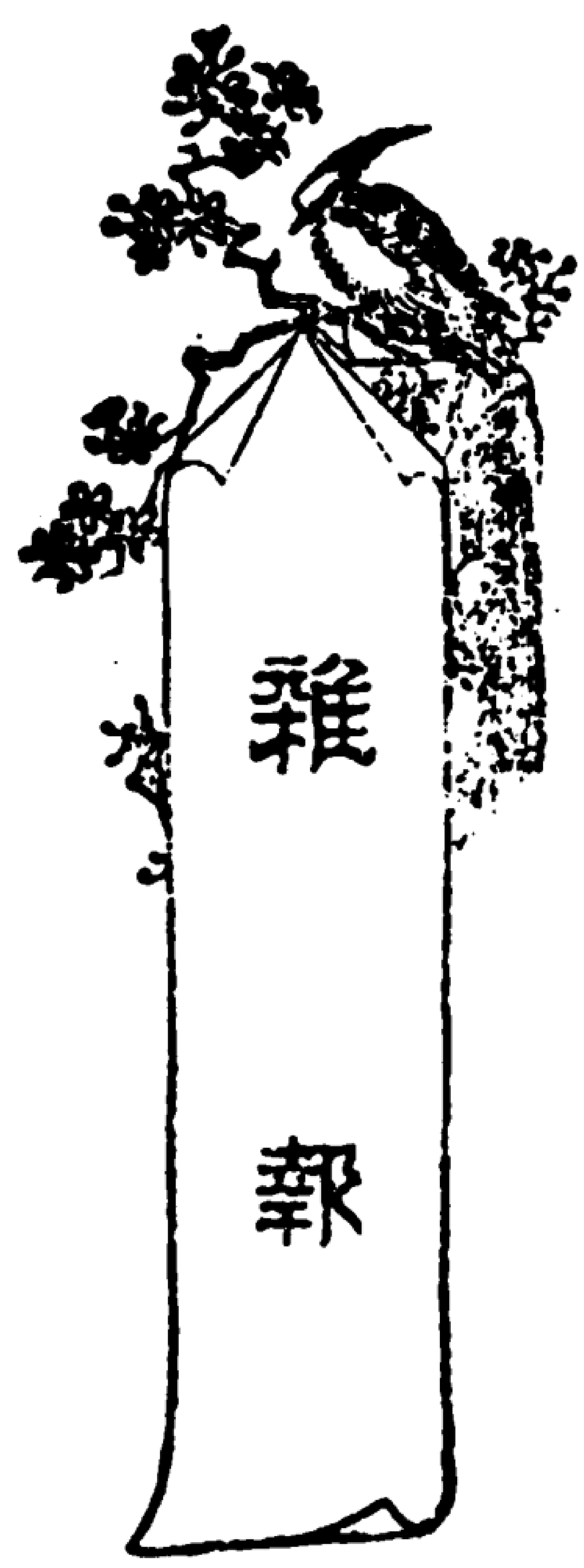
すみれつむ山田のくろに聲たてゝ
くるゝくるゝと蛙鳴くなり

蝶　海上壽子

から蝶はれのが羽風にちるつゆを
たまとはやして花にまふらむ

落花　師岡すか子

春をたゝのとけき時とれもひしは
花ちらぬ間のこゝろなりけり



●皇女御降誕遊ばさる　園權典侍の御姙娠あらせられ、去月二十七日、御着帯の御式を擧げさせられたる事は、前號に報道せし所なるが、本月十一日午後第八時、目出度皇女御降誕遊ばされたり。依りて宮內省より、在京の皇族、並に各大臣にも特使を賜はりたれば、皇族の方々、各大臣の總代等も、皆、參內、御祝詞申し上げたりとなん、吾等臣民の悦びは、誠に此の上もなき事にて、殊に姫君にてましませば、孃たちの悦びは、そのごにもいやまさりてなん。

●東宮殿下の御下賜金　皇太子殿下には、駿州桃郷の御用邸御出發の節、近傍各町村及小學校等へ、左の如く御下賜金ありたり。

金七十圓	沼津町	金七十五圓	沼津高等小學校
金百圓	楊原村	金五十圓	原町
金五十圓	靜浦村	金五圓	楊原村長
金七圓五十錢	駿東郡長	金十圓	郡書記一同

尚此他、楊原神社、同村妙蓮寺、靈滿寺、靜浦釣月寺、同村小池武五郎氏等へも、金若干宛の御寄附及御下賜ありたりと承はるこそいと畏けれ。

●故有栖川宮遺愛の牡丹花　霞ヶ關なる有栖川宮御本邸の牡丹數百種は、昨今盛りに吹き揃ひたるに付、同殿下が美術協會總裁に渡らせらるゝの御緣を以て、同協會員に限り本月二日より三日間拜觀を許されたる由なるが、この牡丹は故大將宮殿下が御手ら御培養遊ばされたるものにて、丈五六尺に達するも少なからずと。

●老女百尺の髮綱を海軍省に寄贈す　宮城縣士族氏家直女は、本年六十二歳の高齢なるが、曩に征清の役中に、女ながらも應分の献品を爲さんと苦心せし所、

軍艦にては髮綱を用ゆとの事を聞き出し、昨年より女子一万人の頭髮を集め、長さ百尺の綱を綯らせ、此程出來したれはとて、勝間田縣知事の手を經て、此程海**軍省へ獻納に及びたるに、軍艦の髮綱は其製造に手數**を費すより、既に廢止され居るも、深く直女の篤志を嘉みし、是を遊就館に陳列せしめたるが、其綱は白髮所々に交り居れりと云ふ。

●**靖國神社の大祭**　九段靖國神社の例祭は、本月五日より八日まで(小一日雨天)三日間、盛大なる祭典を執行せり、其の次第の大略は、五日は二十七八年の戰役、並に臺灣、澎湖島、及び朝鮮に於ける戰死者百四十三名の合祀招魂式を擧行せられ、皇族方、陸海軍將校及び陸海軍諸隊の拜禮式終りて後、今回合祀せらるゝ遺族へも、夫々參拜を許され、神酒幷木杯を附與さる、此日は餘興として、有名なる若山清胤氏の里神樂ありたり。六日は畏くも　皇后陛下御拜として行啓あらら

せれ、玉顏殊に麗しく拜し奉れり、御陪乘は高倉典侍にして、西鄕、大山の海陸軍大臣供奉し、社前皇族御下乘の邊より、賀茂宮司の御先導に玉歩を進ませられ、**忠死の靈に御參拜、直ちに還啓あらせらる、夫より**近衛師團歩騎工砲輜重の各兵順次參拜を終りしは正午を過ぐる頃なりき、此日陛下の御行啓を拜せんとて、我も〳〵と出で來るもの堵の如く、正午頃は九段坂の上下立錐の余地あらざりし、此頃より競馬、煙火等の催はしありし、此日我至仁至慈なる皇后陛下には、靖國神社へ金二百圓下賜あらせられたり、忠勇諸士の英靈若し知るあらむ感涙とゞめあへざるべし。七日雨天、八日は快晴にして、東京相撲協會の寄附せる、角力の興行ありたり、此れにて全く祭典を終る。

●**善那氏百年祭**　本月十四日は種痘法の發明者、英醫ジェンナー氏が、初めて此法を人體に施したる百年目に當るを以て、歐米諸國に於ては、盛大なる百年祭

舉行の計畫中なる由なるが、恐るべき天然痘の禍根を滅絶したる其遺効は、我國人も均しく享受して、子々孫々に至るまで安心する次第なれど、我國の醫學社會に於ても百年祭を舉行し、ジェンナー氏の靈に對して感謝を表せむとて、善那氏種痘發明百年紀念會なるものを設け、土方久元氏此が會頭となり、長與專齋氏副會頭となり、上野公園舊博覽會第五號館に於て、盛大なる祭典を舉行せらる。仝會は朝野の賛成者頗る多く、賛助義損金のみにて七百餘圓に達したるが、賢き邊りにも深く此舉を嘉みせられ、特に御下賜金もありたり、尚は當日式場の整理は凡て宮内省式部官之を指揮せられ、嚴格なる式を舉げたり。

●慈善音樂會　大日本婦人教育會の催しにかゝる、慈善音樂會は、本月九日、上野公園内音樂學校樂堂に開かれたるが、午前第二時頃より、紳士淑女の馬車人車を軋らして、集ひ給へど、定刻のころには、早や立錐の余地もなかりき、本日の主人役は大日本教育會會長公爵夫人毛利安子の君にして、副會長侯爵夫人鍋島榮子の君、其他幾多貴婦人の方々、孰れも甲斐〴〵しく周旋し、懇に應接せらるゝ樣もいと床しく見わたしぬ、頓て時到るや式部職雅樂所諸氏歐洲管絃樂を奏され、夫より添田壽一氏、發起人に代りて、開會の主意を演説せられたり、次に幸田延子孃ヴァイオリンの獨奏に秘曲をつくし、喝采の中に退く、夫より音樂學校生徒諸氏「羽衣」「春遊」二曲の合奏あり、次に年頃五六歳ぞかりなる少女子が鶴龜の長唄歌ひて、時々言葉のまはり兼ねたるなどいと愛らしくればねぬ、次に遠山甲子子君の洋琴獨奏はいつもながら妙じく、次に杵屋、菅浪、望月諸氏の長唄『鞍馬山』あり、小憩の後二部に移り、音樂學校生徒諸氏の『國の光』の唱歌あり、山勢、萩岡、山室諸氏の箏、三絃、胡弓合奏『松竹梅』の曲、少女の瀏喨一しきり聽客の耳をそばたてし

めぬ、次にクレーレ、ヤッコレー氏の英語にて操つる『呑気なるハンス』『薄皮の靴』の可笑しさに、満場の聴客を抱腹絶倒せしめたり、この時、加藤きん子の君は、邦語もて其の概略を説き語りぬ、次にブラチヤリニー氏の多趣なる獨唱歌あり、幸田幸子嬢バイオリン、橘糸枝嬢ピヤノを奏でられき、次に管絃樂長唄あり、満場の士女いみじき樂曲に醉へるが如く、思ひ〲に歸途に就きしははやたぞがれの頃なりき。

●貞婦賞を受く　遠州濱松町故陸軍歩兵二等卒松山静三郎氏の未亡人松山こと女は、去廿七年良夫が征清軍に從ひ、遼東の野に名譽の戰死を遂し以來、十一歳を頭に四人の幼子を育てつゝ、下駄屋を營みて三人の職工を指揮し、貞節正しく能く財政を處理すること、古貞婦に耻ぢざる事等、東京貴婦人瓜生會の聞く所となり、其善行を賞し　皇后陛下御製の綳帶屑を以て製したる白布、及び銀杯一個を贈與されしに付、去廿六日濱名郡役所に於て其傳達式を行ひたりと。

●高知高等女學校　現今三府の外にて、公立高等女學校の設立あるは、福井、栃木、和歌山、及び高知の四縣に過ぎざるが、中に付て、高知高等女學校は、九十八人の生徒を有し、從て學科の程度も高く、他の三縣に比すれど、卒業生の學力は余程優等なるものなれども、女子に最も必要なる裁縫、手藝等の實業科は學力に比して甚だ低度なるを以て、卒業後も實際の實業上、大に不都合を感ずること尠からざるを以て、同校に於ては此の點に見る處ありて、今後之か改革を計り、學科の程度を變革して、大に實業科を盛んならしめ、一家の主婦として耻づかしからざる女子を養成せんことに力を尽し居れりとの報あり。

●降霜の被害　本月五日より、八九日の頃にかけて、長野、群馬、栃木、福島、埼玉、岐阜、及び京都の各地に降霜ありて、農作物に尠からざる害を被りたる由、

就中桑葉の被害は最も甚しく、長野、群馬、福島の地方は養蠶の最も盛なる處なるが、桑の收入に平均三割方の減少を呈したり、されど之より桑の供給に不足を告げ、收益に至大の損失を被るべしと、一般養蠶家に恐慌を來し、中には蠶兒を捨つる者さへある由にて、爲に生絲は俄に一割余の高價に騰りたりと、又、京都、岐阜地方にては、茶芽に少からざる霜害を及ぼし、收入大に減じたれど、此、亦、價格の騰貴を見るべしと云ふ。

●松方伯舊師の門を訪ふ　鄕里鹿兒島に滯留中の松方伯、一日舊師平川嘉平翁の遺族を訪はんとて、從者を引具し、巡査の案内にて其住めると聞く二本松馬場に至り、此處彼處を尋ねけるも、その消息を聞かざりしが、不圖荻原小路に移り居れりといふものあるを辿りて、直ちに其處に至りしに、小なる軒傾きて、見る目いぶせき賤が伏屋に尋ねわたり、恁まで世に捨てられて居るとは今の今まで知らざりける伯は、幾度か目をしばたゝきつ、さて案内を乞へば、姿衰へたる老婆の誰何樣ぞとて足元も確ならず出で迎ふるを見、伯はそれよと心に知りて、御身はわれをなほ記臆してれはすやいかにと問ひけるに、老母は不審しみつゝ否とよ妾は知り侍らずと答ふるに、伯は左もればさむ、自分は松方正義にこそ候へ、舊師の恩忘れたりとにはあらねど、われやこれやの事にまぎれての今まで疎遠の罪をも謝しまゐらせ、一には昔床しき物語をも致さむとて參りたるに、御健なる樣こそ先づ以て芽出度けれと會釋すれど、老婆は呆るゝばかりに打驚き、さては金樣にて在すか、立派に御出世なさるゝものかな、然仰せらるれど何處やられ顏に見覺あるやうなりとて、嬉し涙に咽びながら手を執らぬばかりにして、名ばかりの座敷に通し、破れたる茶碗に山茶の歎待も、玉盤金盞の珍味に勝して辱なく、越方の事語り出でゝは、

涙の瀬川堰止めぬ老婆の心、思ひやるだに胸ふさがりしが、伯は涙を抑へて、恩師一家の斯までにいぶせき御生活と、夢にも知らざりしは、忠孝信義の道を聞たる弟子の身に、重々深き無調法なり、不日歸京の上は、樺山(臺灣總督)とも相談して、惡しくは取計ふまじと、種々に慰めつ、菓子料として金六圓を與へ、その日はそのまゝ歸られしとなん、猶伯は舊師の孫の、同地尋常中學に在るを聞き、歸京の上は樺山伯と共に充分の保護を與ふる筈なりといふ。

●鳥尾小彌太氏義太夫を研究す　鳥尾得庵氏徃ぬる月、さる宴會の席上にて太夫某が義太夫を聞しより、其文章自然の妙を極め、其節奏天樂の美を奪へるに感じて、心窃に義太夫の研究を思立ち、餘暇あれば觀念の窓に對ひ經机を見臺に代へて、丸本の素讀を爲し、抑揚波瀾其妙を極むる所に至れば覺えず拍案快哉を呼び、人あり訪ひ來れば每に之に語つて曰く、義太夫は天下の大文章なり、余は今後あらゆる名作を讀破し、詞花言葉の末に至るまで一々其意味を尋ね、然る後相當の師匠に就きて稽古する考なりと。

●安房の歌人　安房の國長狹郡吉尾村に、今を去ること一百年ばかり、明和の頃、杉庵志道といへる歌人ありき幼より物學びを好み、敷島の道には殊に深かりければ、其名雲井に高く聞え、やむことなきあたりへ召されて、かしこき御前にもうでゝ、御講義申上しより、時の　帝の御感に入り、御階の梅枝を折らせたまひて下したまひきとなむ、かくて翁は年老ゆるまで都に留り居たりしが、天保十三年七月十一日といふに、高齡七十八歲にて身まかりぬ、後に忝なくも九年を經て、齋瓊靈神と神號を下し賜はりきとなむ、かくて世に拔け出でし人の、埋木の世にうつもれぬるこそ是非なけれ、今は墓所さへ荒れ果てゝ、只吊ふものは芝生にしげくれく露と、草村にすだく虫の聲々とのみ、

あはれとも又はかなきことの極なり、同郷の人安田良平氏頃日そをいたく歎き、一の石碑を建てゝ之を不朽に傳へむやと有志の人々に謀り、數十人の贊成を得て建碑を企てしは一昨年の事なりき、爾來其事をきゝ寄金者いと多く、碑も已に落成し居れど、建碑も遠からざるうちなるべし、其篆額は東久世伯にして、下に翁の肖像と、正二位具集公の書を刻せられ、其石摺はいとうるはしく見ゆ、思ふに翁も草葉のかげにてさぞよろこぶなるべし、翁の長歌あり

洞中御階下の紅梅を下し給はりける時
よみて奉りける長歌

かけまくも、ゆゝしきかも、いはまくも、あやにかしこき、玉敷の、都を遠み、鳥がなく、東のはての、安房の海、きしべにたふる、濱つゝら、あやめもわかぬ、言の葉を、伊香保の沼の、いかにして、天津空まで、聞えあげ、御はしのもとの、梅が枝を、かざしにせよと、くだれるは、後の世までの、跡となし、そのよろこびを、おもふほど、思ひはつきじ、父さまは、父にかたらむ、母さまは、かたらむものを、すべをなみ、御垣の外に、をりたちて、をらくもしらに、たつらくの、たつきもしらに、百磯城の、大宮所、見あげつゝ、只だふとさに、涙こぼるゝ、

天保戊戌歳五月　七十三歳　杉庵　志道

● 坪井博士と下戸征伐　過日芝區三田四國町惟一館に開きたる學術講談會に於て醫學博士坪井次郎氏は第一に今の世は獨り禁酒節酒など上戸の方ばかりを兎や角云ふべからず甘いもの好きの下戸黨をも征伐せねばならぬとの口開きにて、本邦固有の菓子の糖分に富み、鑛毒を含みて体質を害する理を説き、菓子には多少の油分を加味して、漸次人々の嗜好を改良すべき旨を演説したり。

● 馳走は小饅頭一個　此程の事とかや、三州渥美郡

豊橋町大字指笠の某方にて、當時同地に滯在中なる、石川鴻齋氏を招待して饗應したしとありしにぞ、氏も早速承諾して、當日態と某方へ鮮魚を贈り、軈て同家へ到りしに、主人先つ今日の入來を喜び聽ゐ、僻地の事とて別に何の饗應方なしと挨拶ありて、熊をも欺く下婢の振可笑氣に運びし膳部を唯見れど、氏の贈りし肴に小饅頭一個を添へたるものなりしにぞ、流石に氏も苦笑しつゝ、

饅頭のあんの外なる茶によぞれ
虎屋にあらで猫に魅さる

と口吟みしに、某は夫とも悟らで、雪中山水の畫を需むる事切なれど、氏は筆に任せて走り書しつ、偖て短冊に

肌寒き貧乏神のかけものは
雪の景色も薄墨の山

と認め與へしとか

傳染病に就ての警戒　歐米諸國の歷史に徵するに、戰爭に於て人の斃るゝは常に戰役に依り疫病の發するに依る者多く、其甚だしきは戰爭中にあらずして、戰爭後にあるは、各國其實例を同くせり、今や我國は戰後に屬し、殊に北清地方、若くは臺灣の如き寒暑共に酷甚なる土地より歸來する兵士人夫は十數萬を以て數ふべき程なれど、本年疫病の流行する事は豫期し置かざる可からず、即ち痲剌利亞熱、窒扶斯、赤痢、虎剌列、天然痘、黑死病、回歸熱等の如き皆畏懼すべき者ならざるなきを以て、內務省其他公私衛生會にては、本年の夏秋雨期に向ひ、各自豫防上に注意し警戒せしめんと、目下種々協議中なりと。

●**盲啞學校の盲生歌合**　去四月二十五日、東京盲啞學校創業二十年を祝する席に、啞生は、種々の狂言手品等を巧みに演し、同校職員一同を驚せしに、盲生は、急に思立ちて歌合をなし、教員高津柏樹氏の判斷を乞

ひしといふ。今其二三を得たれど、左に揭ぐ。但し皆即詠にして、少しも添删を加へざるものなりと云ふ。

一番　左　かはづ　宮崎六太郎

鶯によびれてこされてころよりも
　ねふりをりにし蛙なくなり

右　燕來　河原井秀明

春たてどかすみを空のしるべにて
　こゝらつばめの今や來ぬらむ

判歌　柏樹

今やこむこゝ羅つばめの羽音にも
　なけど蛙はなほねぶるらし

二番　左　雲雀　田中生三

菜の花を見つゝゑみつゝ昇りゆく
　ひばりは天津空につくらむ

右　歸厂　服部千多男

八重霞よもにたなびく春なるを
　かりはいつこの道をゆくらむ

判歌　柏樹

八重かすみ棚びく道のかりきけは
　あまつ御空にひばりなくなり

三番　左　待時鳥　石川久藏

深山にもいまた聲せぬほとゝきす
　わが宿ちかくいつ來なくなむ

右　雉　中島健次郎

幾度かけふりのかけを見かへりつ
　聲あはれにもきゞす鳴くなり

判歌　柏樹

みかへりてなくはきゝすか郭公
　みやまに聲のせぬを誰かいふ

四番　左　茶　加藤安藏

宇治の里にさきにし花は乙女こが
　てごとに摘るかこのかすなる

右　點字　　　　　　　　相澤龜太郎

有難きさくりの文字にさそはれて
めなしの里もひかりをあふく

判歌　　　　　　　　　　　　　柏樹

有難きさくりの文字のひかりには
宇治のこのめの似るべくも見ず

五番　左　鍼治　　　　　　　品田勇次郎

神わさとかねて思へとれもひきや
命をまゝにさしとむるとは

右　按摩　　　　　　　　　堀宇三郎

こしかたは雨に嵐にもまれしも
揉て世に立つ身とぞならまし

判歌　　　　　　　　　　　　　柏樹

神わさとならて手業のなるべしや
もみて世にたつ針のいのちも

六番　左　箏　　　　　　　　佐藤國藏

かきならす琴の調のたへなれど
春のかすみもまひをとる見ゆ

右　創立二十年紀念會に　石井重次郎

窓の外にうたふうぐひす二十年の
むかしの春はいかにきゝけむ

判歌　　　　　　　　　　　　　柏樹

うぐひすの歌ふをきくもはた年の
けふそまことの調なるらん

七番　左　杖　　　　　　　　佐藤力藏

つく〳〵と學びしわざを杖として
めてたき御代にすゝめ我が友

右　笛　　　　　　　　　　服部知多男

あさ島のこゝろをこめしふゑ竹の
ねはとつくにの人もめつらむ

判歌　　　　　　　　　　　　　柏樹

笛たけのふしもねさしもつく杖の

道のすゝみをきくぞめでたし

●世界各國小學校の數　最近の調査に據れば、世界各國小學校及び小學生徒の數は左の如し(統計學雜誌)

國名	小學校數	人口千人に對する小學生徒
獨乙	五、八〇〇〇	一六一
瑞西	八一〇一	一六〇
瑞典	一、〇五一六	一五九
英吉利	三、一六〇〇	一四六
佛蘭西	七、九七五五	一四六
那威	六七〇〇	一四五
和蘭	四〇九七	一三八
嗹馬	二九[illegible]〇	一二三
澳地利及匈牙利	三、二九七八	一一一
西班牙	二、九八二八	一〇二
白耳義	五六一四	一〇〇
日本	二、四〇四六	八三
以太利	三、五七四八	七七
希臘	一六〇〇	五〇
葡萄牙	五三一六	四六
セルビヤ	六六八	二七
ルーマニヤ	二五〇五	二三
露西亞及フインランド	三、八二三八	二三

●電話交換手聽覺の發達　電話交換に從事する少女等の聽覺の發達は、實に驚くべき程にて、例へばロー式電話交換にて、加入社接續を求むるときは、普通先づ對手の番號を聽きたるのみにて、未だ喚呼者自巳の番號を通知するを待たずして、接續を爲すことあり、是れ全く其の聽覺の非常に銳敏なるより、平素各電話器に於ける送話器の些細の特徵、若くは受話器を取下すときに生ずる微響の異同等を記臆し居るを以て、其

數手の番號を呼ぶ時に於て、已に喚呼者の何番なるやを辨知し居るが故なりとぞ。

●晝間の最も長き國　先頃ベルリンの或る學術會の席上にて、歐洲各國中、日光を見る時間の長短につきて議論出でたり。其際の調査によるに、西班牙最も長くして、一年平均三千時、伊太利は二千三百時、獨逸は一千七百時、英國一千四百時にて、西班牙の首府マドリツドの住民は、倫敦人民より二倍强の時間だけ日光に照さるゝ割合なり。

●製茶試驗場　農務局は本年より製茶試驗場を王子西ヶ原試驗場内に新設の筈にて、目下着手中なるが、同場内には山城宇治を始め、各産地の茶苗を植え付け、既に充分發芽せしを以て、過日より摘採に着手し、掛員は農務局の大井技手擔當し、諸事を指揮監督せりと云ふ。

●暹羅の奇風

○一夫多妻　は此國の最も名譽として誇る所なれば、王室には正當の皇后二人の外に、妾は百人餘あり、王宮内は婦人にて充滿す、其他の貴族及富豪者皆、妻妾の多きを以て人に誇る、妾は一の雇人の如く權力極めて微にて、本妻の前に出でゝ頭を上る能はず、唯だ本妻の二人同權なるものあるを最も奇とす。

○僧侶無妻　僧侶を重んじ、之を尊崇すること王侯の如く、之が爲に僧侶は甚だ多し、而して僧侶は品行方正にして婦人を近づけず、故に男女平均を得て割合に無妻者少なし。

○王室　暹羅現時の國王は、ネローンソンデッナピラグラミンドルと稱し、本年四十七八歲、温厚の性質にして王妃は二人あり、第一妃の太子は昨年一月廿八歲にて死し、現今の太子は第二妃の生む所にて、本年十六歲、目下英國倫敦に留學中なり。

○婚禮　氣候の温暖なる爲に男女ともに身體の發達

早く、女子は十三四歲、男子は十八九歲にて結婚、女子は十五六歲にて既に子女を生む、此の如く發育早き故壽命も短かく、七十位は最長命者と爲すよし。

○奴隸賣買　は古來久しく行はれ、奴隸を多く有する者は之を名譽と爲し、現文部大臣の如きは百人餘の奴隸を飼ふ、此の奴隸は殆んど牛馬と同一に待遇するものにて、男女にて終日爲すこともなく起臥して食事するのみ、稍や敏捷なるものにても、僅かに菓物を市中に販き、錢を得て好む所の物を買ふ位に過ぎず。又奴隸中に夫妻あり。窃盜を爲すものあれど主人之を罪に處す、其の處刑は鐵鎖を足に纏ひ、水汲、庭掃除等を爲さしむるなりとぞ。

●心の栞　てふは、栃木縣高等女學校敎諭豐田芙雄子の、同校第三回卒業生に與へられたるものにして、世の婦女子たちの心得にもならんふしの多ければ、此に掲げて普く世の孃たちに示さむ

心の栞

今諸氏等が、此校の業を卒るに當り、目下の心得なくしてはあかず、思ふふしなきにしもあらざれば、聊か我が思ふ所の大略を記して、諸氏等が家に歸り、女子の常務に就き給ふ心の栞の片はしを述べて、いよ〳〵諸氏等が幸福を祈らんとす。

先その始をいへば、女子母親の膝上を離るゝに當り、大凡先幼稚園にゆきて、その身の健康とその心の快樂とを養ひ、漸々學齡に達れすば、小學校に入りて兒童の學ぶべき學科に就きこれを學び、又ひたすら家庭の薫陶と相俟ちて而して後ち、ろの童女たるの訓育に浴す、則、容儀、言語、立居、振舞、又家に在りては父母に孝に、兄姉に從ひ、出でゝは敎師の敎訓に從ひ、又賓客を敬ひ、朋友に信切なる等の義方に從はしめ、又學問の暇を以て稍これに科するに、針業編物等の簡單なる女巧を學ばせ、夫より年稍長するに隨ひて、高

等女學校に入り、始て女子中等教育の學科、則これ迄習ひし諸科を擴張して、之を學び、その女子たるの道を明かにし、是よりは學年と共にいよ〳〵女子の從事すべき業務、則天職の有る所を修めて以て、良妻賢母となるの資料を養成するに外ならず。

然り、而して、その學業年と共に卒るの日は、則ち我家に在りては、專ら敬事して以て父母を助け、兄姉と心を協せ、弟妹を導き、其の他何くれと家の事を爲して、我が將來向ふ所の準備を定む、而して幾程もなく他の家に嫁しては、その舅姑夫を愛敬するの關係より始め、叔妹の和親すべき、家政の整理すべき、育兒敎導老者病者の看護、その他一般家務の如き、孜々として勤めて以てその職分を盡し、良夫をして內に顧るの患なからしむ、これはた一として良夫を助るの事たらざるはなきなり、轉じて社交の如き賑恤の如き、是亦人世必須のことにて、則此世に處するの義務なり、

こは既に家政學に於て大略心得られしなるべけれど尙其未だ嫁せざる前より熟くこの道理を辨へ知らずむ有べからず。

先以て是等の義務を全うせんとするには、豫てより學び得しことにはあれど、尙之を忘れざるがため、常にこれに培ひ之を養ひて、いよ〳〵その根本を固うするのみなことに勤めずむ有るべからず、且之を固うするのみならず、旣にこれ等の敎育を受けたる者は、此世間に向ひて、世間の摸範となることをしも心懸けずむ有べからざる也。

先其世間の摸範とならんとするには、第一に自身の心術を正しくすることを心懸くべきこと是也。然り、其の心懸けはありと雖も、是を以ていかに世の摸範となるべきやといはゞ、凡そ貌は心の標し也と云ふことを思ひて、その出來得るのみ自身の心術を正しうする時は、其言を語らざれ共、自ら外面に顯はれ、軈て人そ

の實を察するに足るべし、昔の柳公權は心正しき人なりしかど、そが手跡にまで顯はれしと云へり、されど其心術を正しくせど、自然我が容貌、言語、擧動及其嗜好、其衣裝抔質素高雅にして、他人の摸範とも成るに至るべし。

此、言語、擧動、衣裝、嗜好、高尚に趣くときは、自ら其家はいふ迄もなく、其土地其所の風俗をも一變し、則其所の良風儀を造り出すに至るべし、これ女子の風儀に關しては世の風儀と尠からさる關係を保てること、既に中等教育を受けたる世人は知諒せずんぞ有べからざる也。

之に反して、是等の諸事(嗜好、風俗)鄙劣にして摸範とするに足らざる時は、とりも直さず、其會て受けたる教育も、世の裨補をなす能はず、却て風俗段々に汚濁鄙劣となりて、いと淺ましき弊にさへ陷る、これ其身中等の教育を受けながら、反りて我身鄙野に居り以て安んずるは、其罪あり、且義務に背くと云ふべきのみ。

されど、實に婦人の風裁(ナリカタチ)擧動は一家より及びて、やがて國家の風俗に關係すめれど、よく〱正すべき事なりかし、是世の中等以上の婦人たる者、最常に心懸けざる可らざる一要務なり。

又中等以下則下等社會の婦女は、其勞働勞力を以て社會の卑き所に立ち、各業を營む者なれど、其勞は賞すべくあるも、素り學問を勵み智識を磨きて、人の摸範となるべしとしも望みあへねど、其言語、振舞、衣裝の如き、下劣なるも深く咎むべきに非ず、しかれ共、玆に一つの恕すべからざるは、人各々其分を知りて、其身の德を修め、女子たるの不面目なからんことを保つに至りては、毫も假借する所あるべからず、こは偏へに其の上中下の差別なく、押並べてのことなれど也、而して中等以上の女子は、先以て前に述る事の如きは

女子の務として心懇くべきこと也とす。

言語は男女となく大切の事なれ共、別て女子は大切なり、されど、女子の四徳の中、第一に婦言と數へ言ひたりき、そは兎角をみなは無益の言葉多きものなれど、先づ言に誤ちあるを防ぐがために、しか言ひたる也、去りとて言ふべき時言はず、且れのれの思想をも言顯はすこと能はざるも余り不つゝかにして、斯くては物の用をなさず、是亦一つの不幸とも云べけれ、されど其言ふ可き場合を知りて言ふと、又其言の明了に分るを以て度とすべし。

其言ひ顯す言語は、高尚、下劣、野卑等の別あり、成るべく野卑下劣に渡らず、敬語を用ゐべき場所には其を用ゐ、成るべく上品なる言葉にて言ふべし、若し其下劣野鄙なる言語を以てものいひさかなき時は其品甚劣りて見ゆるもの也、これ教育ある女子一の心懇くべきこと也、或人の曰く、言語は取飾りなく淡泊なるをよしとす、又人にあてこすり、人の腹を探り、人の陰事を言ひ、我見ねを語り、人を羨み、人を恨み、嫉み、妬む等の言語は、之を言ふべからずと、是誠にさるべきよき誡めなり、而して上に述ぶる如く、我が心術だに正しければ、かゝる言語も自然自ら制し得られて、慢言せざるに至るべし。

次に衣裝のこと、中等以上の女子は、其布と帛とに拘らず、身分だけの品格を保ちて、賤しき者を見習はざる樣有たし。衣服は身の文なり裝也、之に因りて其品格を保ち、又其の人の用意の程も、何となく衣服に映じ出るものなれど、夫々其身分相應、賤しからぬ摸樣、縞柄、染色等を見立て、成るべく高尚なるをよろしとす、且餘りに時の流行を追ひ過ぎたるもいかゞのものにや、篤と心すべきことにこそ。貝原益軒翁の言葉にも、衣服は都て、人の年齡よりも少しくすみしをよろしとすと見ねたり、彼の翁の訓言實に親切なりと云ふ

べし、而して衣服は身の飾り、寒暑の防具とはいへ、其身の品格を保つもの故、餘り目に立ち、又は華美燦爛たるは、平時に在りては却て品の程劣りて見ゆるもの故、注意すべきこと也。

次に頭髮は、世の沿革と共に、今は幾多の變遷を經來りしも、今の世には自ら今の世の結髮束髮等あり、强ち異樣を好むにも及ふまじけれ共、彼の賤しき社會即藝娼妓抔の風は、決して眞似すべからず、人は其髮の結ひ樣にて、正しくも不正にも見ゆるもの也、又は需めて彼の古代めいたる抔もこれ皆奇を好む也、毎の言語にも、其髮形ち恒あるは心替らぬ標しといへり、こは兎まれ角まれ、髮形ちを玩弄物視して、屢々替ふるは、心實落付きなきとの意なるべし。

次に嗜好とは人の好き嗜み也、この嗜好に付ては大に說あり、一體女子は、内政家事に從事するを以て恒とする故、その内事にとりては嗜好とすべきこと種々あり、先以て普通の嗜好を言へば、其中等以上の女子たるもの、家の業務の暇に、第一に嗜むべきものは讀書なり、此讀書を爲して、我德性と才智とを絶ゑず培養する事を勸むべし、實に良讀書は安全なる良友也、賢明なる良師也、愉快なる同伴也、其之れを爲せば毎に我れを面白く導き、知らざることを知らしめ、聞かざることをしてよく聞かしめ、又時として我が鬱氣をも散逸せしめ、無聊をも慰め、我れの非をよく悟らしむるに至る、是此の良讀書に如くものなし、其功其益一々かぞふるに遑あらず、誠に世の女子、家務の暇或は職業の暇を以て讀書を爲すことをば廢すべからず、我國當今の若き女性たち、讀書は學校にて修業中のみ致すものなりとしも心得たゝめる人數多あり、これ誠に謂れなきこと也、學校の修業は諸科諸學、謂はゞ其の端緒を示すものにて、たとへば、高き山に攀んとする其の麓を指して、この途より此の嶺にまで登るべし、此

頂に登らむ斯くして云々すべし、云々の物あり抔、その大概を說き敎ふると同一理也、其後程經て眞にその山に登らんとする場合に立ち至りなむ、前に得しことを恰も栞となしつゝ、徐ろに實驗の用に供するが如きものなり、大方の學校學問は皆斯の如き觀あるものなりかし、されど讀書は、一生盡るべくもあらぬ良師良友と思ひなさむ、實に其身を益し、且其の心意の高尙をも保ち得らるべし、我國婦人社會、少し年長したる女性に在りては、書抔讀むは餘計なることにても爲る如く考ふるは、全く敎育の未だしき時代因襲より來れる習慣ともいひつべし、いかに年長け老いたりとも、日々新たなる世の事に暗けれど、めでたきこの明治時代の婦人として、良夫を助け子を敎養し、天晴れのが天職を盡して以て、幸福なる家庭を造るに於て、いかて欠けたるふしこれ無しとのみ爲すべきや、故に志ある女性は、讀書は生涯の師友とすべき事を悟らまし

かくことなりかし

其他嗜好としてよきもの種々あるべし、讀書につゝきては、詠歌、文章抔はいと高尙なる好みなり、又、繪畫、刺繡、裁縫、紡績、編物、造花、其他細工物是等もひたすら女子の嗜好品として、室內を裝飾し、又は、衣服、染色、摸樣抔移り能き配合を知り、其種々の場合に調法なること數多あるべし。

裁縫はたとへ嗜好不嗜好に拘らず、是非に之を修めずむ、眞に家庭の整理は出來難し、人の都合に寄りて他の技藝はよし知らずとも、此の裁縫のみは知らずしては叶はじ、故に我學校にては、殊更にこの科に重きを置く所以なり。

紡績織機或は養蠶は、素より女子適當の業なれ共、或場合に因り、時誼に隨ふて暇あらは業ともなし、又樂ともなして其成功を看るべし、是等の業は女子をして、專ら事業に勤勉を導き、勤勉は、質素儉約を導くの要

素にして、其功大なり、故に都會に住む人は暫く置き、彼の青々たる廣地其空氣毎に清く、田野近く住める人は、是等の業一には勸業、二つには其を以て樂みをも得べく、又一方には經濟の良策ともなりなん。暇ある女性は、毎の嗜好中、音樂、茶湯、挿花等の技、これ一つは精神を慰め、態度を整へ、耳目を樂ましめ、心意を練る等皆夫々能あり、其暇ある身は、耽るをだに制しなば、少しは心懸ることもよかるべく、しかれ共、所謂遊藝は耽り易し、ふくるときは他を怠る、故に茲に豫め戒め置きてこれを爲さば恐らくは爽はざるに庶幾かるべし。

次に中以上の女子は父兄夫の身分体面をも保つため、夫々の場合を以て社交と云ことあり、ゐは最も身分及其場合に隨ふことなれ共、先以其一般の心得なくて叶はぬ事也。

昔日の冠婚喪祭などいひて、いと近親の外は、婦人の交際往來はなく、專ら男子のみに限る樣にいひしも、今は強ち獨男子の專有物に非ず、娘たる場合は母に隨ひ、夫人は夫に伴はれて交際するの世となり替れり、最も男子のみ交際して、婦人の出ざる場合あり、之は別問題として、其夫妻並ひに交際する場合には、相互に其禮を欠かざるを以て良とす、先其一端を云んに、人家を訪問するには、午後二時より爲すべし、又餘り日暮に臨みて訪ふべからず、平常の訪問には午前より往くべからず、是等は都て先きの主婦も家事向、其他身の繕ひ等未だ暇なくしてあらんに、ゐをしも驚かさんは、無氣に心なきわざなれば也。

然して訪問の節餘り談話の永きは、主人をして退屈ならしむるの嫌らひあれは遠慮有るべきなり、大方一通り挨拶終りなば、春は花鳥、夏は卯の花時鳥、秋は月、紅葉、菊などの噂、冬は霜雪しくれなど、又夏旅に得たる噺しなど、さし障り無き會話をなして、相互に慇

慙のこゝろを離さず、苟も先方の氣障りなる談話抔ゆめ〳〵注意あるべし、又餘り自身の談話のみをなすべからず、又假りにも、鄙俗淫猥なる談話、人の批評、及び知人の譏誹等決て言ふべからず、且訪問談話終らば、二十分或は卅分にて恭しく退くべし、要事ありて往くは之の限りに非ざれば、必しもこの時を以てせずとも、そは先方の都合を聞合せ置き、それに從ひて往くをよろしとす。

人より食事に招がれたる時は、衣服を始め、夫々普通禮をも守るべし、禮なく疎忽なるは、中々に傍ら痛く、且主人に對して欠禮に當るは辨へなき人の爲る業にて、苟くも紳士淑女の決して爲すべき事に非ず、もし夫等の禮不案内ならんには、熟く心得たる人に聞合せなどして其指圖に從ふべし、而して其我を招きし人尊長ならば、明日或は三日乃至の中答禮に往くを禮とす。

人より訪問を受けたる時も、一周間中には必ず答禮に往くものとす。

又人より我家に訪問を受る時は、成るたけ在家日を定め置き訪問者を受るを良とす、されど豫て訪問日定まり在らば、都て來客の設けもあり、何事も差支なからん、若し其設けなく、不時に來客ありとて、餘りに客人を侍たせおくは不禮なり、又主婦は、鬢髮蒼芒、容姿齷齪たる樣して對客するは如何にも見苦しけれど、豫て夫等の心懸けはなくて叶はじ。

又、豫て客を招くか、或は訪問を受くる等の日は、主婦として、娘として賓客に對するに、餘り華美なる衣服身の飾裝は用ゐざるをよしとす。其故は主人餘り美麗びやかにして來客に輝かすが如き体裁あるを恐れて也、唯々質素清潔にして、閑雅なるこそ反りて奥ゆかしけれ、且其賓客の饗應は寧眞實厚意を先にすべし、いかに食膳盛んなるも、主人の實意なき場合は何事か不足の感あるべし、殊に女子、親の家に在りては母親

を助けて、來客の取賄ひは天晴注意を加へ親切を表すへし。

召使ひを遣ふには種々の注意あり、大方は家政學にて學びしことなど繰返さるへし。

終りに臨み、玆に最も大切のことにて、いはずして止み能はざる事一あり、そは最も謹聽を要すへき事也。女子は學校修業を終りなば、追々と他に嫁するの時期來るものとす、此時に當りて、諸氏等の慈愛深き父母は、その好偶を選んで之に嫁するの場合に當るなり、此時諸氏等は何事を考る乎、夫、女子は一度人に嫁しては、飽迄貞操確固たる決心を有せざるべからず、故に父母、我のため其好偶を選むに當りては、先つ吾が生涯良人と仰ぎ良同伴として確實なりと識認し得ざるに當りては、慢りに婚を許すへからず、素より之を選ぶは父母の選に因ると雖、然れ共巳れの生涯を托するもの故に、自分容喙の權有るは素よりの事也、而して之に容喙するとて、其我儘氣隨を以て好き嫌ひ、又は彼是我意を主張するの謂に非ず、専らこれを我生涯良人として、又我父母等に對するに、女婿としての關係を全うするや否を見定めて、以て諸事父母と協議を遂げ、然るのちに約束を定むべし、決て輕卒なることとして忽ち破鏡の不幸を見るの世に倣はしむる等の事有べからず、婚嫁は人間生涯の幸不幸の繫る所にして、實に一大事也、忽せに爲すべきものに非ず、されど苟も一度婚を許したる以上は、たとへ如何なる不幸に出で會ふとも、己れの遭遇にして、則我の天命なりと明らめ、泰然として動かず、百難をも排して辛苦に堪ふるの決心なからざるべからず、若此決心なかりせば、焉ぞ女子として貴び信ずるに足らん。

（未完）

教の庭

五月廿日兼題　田家卯花　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天

おもしろくうつぎの花のさきにけり
　とりつくろはぬしづがかきねに
磐城國石城郡泉村十三番地　牛谷いく子

地

あれはてししづか伏屋のかよひ路を
　しるへかほにもにほふうのはな
東京本郷區駒込東片町　北島松子

人

來る人のしるへにとてや植えつらん
　やま田のいほに咲ける卯のはな
東京麹町區不二見町五丁目　小曾根しう子

人

賤がやのかきのうのはなさきにけり
　かどたのさなへいまかとるらん
越中國下新川郡入善町　高田きよ子

なやまたの畔に咲きにし卯のはなに
　しつのてわさもなこたりぬへし
賀井そめ子

かけにほふはかりに見ゆる垣内田の
　なはしろ小田に咲ける卯のはな
宇田川よし子

ほとゝきすきなく田中のしつか家に
　咲ける卯のはないまさかりなり
小野田さく子

かはつなく田中のささにきて見れは
　ふせやののきに卯のはな咲けり
小野田ひで子

あしひきの山田のしつかいほりにも
　ゆきさまかひて咲ける卯のはな
岩崎ふく子

いなしきの伏屋にのこるしらゆきは
　いまなさかりのはなのうつきか
小玉きん子

せき入れしなはしろ水にかけ見ゐて
　いまなさかりさ卯のはな咲けり
宇田川うめ子

あせ道なかよふひとさへ見へにけり
　かきたに卯つ木咲きそめしより
石井さめ子

ふせいほの田ふせなめくろ卯の花は
　つきのかけよりうるはしきかな
佐々布鄰子

賤かやのかきのかきねのまはらにも
　あはれうつきのはなさきにけり
永井さい子

むらきもの雪かさみれはやまさとの
　しつかかきねの卯つきなりけり
住山淺子

ゆふつきのかけさ見ゆるは卯の花の
　さきつるしつかかきねなるらん
住山せの子

やまさとのかきのうつきの花さきて
　ふたゝびゆきのつもるかさみゆ
井澤すみ子

しつの女か布やさらすさちかよれは
田代艶子

かきねましろにうつきさくなり　平澤ふさ子

しつかやの垣ねにさけるうのはなは
さすかにゆきのふりしかとみゆ　大谷津琴子

やま里のなはしろみつにかけ見せて
いまをさかりに咲けるうのはな　佐々木ちつね子

ほとゝぎす待たぬ宿にも咲きにけり
田なかのささのかきのうのはな　原いち子

うの花のさかりに咲けは小やま田の
かきねのなつをひともとふらん　増田すゑ子

時ならて積もるゆきかと見ゆるかな
やまたのいほのかきのうのはな　百瀬八代子

忘れてはゆきかとはかりおもひけり
たなかのいほのかきのうのはな　百瀬かつ子

いつしかも夏や來にけん小やま田の
しつかかきねにほふうのはな　森川いれ子

あれはてし田守かいほのそてかきに
かゝれるゆきと見しはうのはな　勝もゝ代子

山田もるしつかかきねのうのはなを
なつなほ消えぬゆきかとそ見し　萩原しける子

せき入るゝ門田のみにゝかけ見えて
やゝちりそむるかきのうのはな　上條よし子

せき入れしかと田の水にかけ見えて
かきねましろに咲けるうのはな　松尾こと子

時ならぬゆきかとはかりしはかきに
うのはなかをるをたのいほかな

松はたくやまたのいほのけむりにも
うつきのはたはすゝけさりけり　小野田のふ子

をやまたの庭のかきねのうのはなは
ゆきのつもれるこゝちこそすれ　小町寺さう子

うは玉のやみをつく夜さまかふまて
よしののさゝにさけるうのはな　島田悦子

さきにほふ賤かかきねのうのはなも
ゆふへのつゆにいろそまされる　畠山千代子

やまさとのかきねにゝほふうの花や
きよきこゝろをいろに見すらん　今藤なか子

しつかやにさくうのはなをしろ妙の
ころもほすとやひとの見るらむ　山根久子

しつかやの門田にゝほふうのはなは
かきねになみのよるかとそみる　佐々小琴子

かはつなく田中のいほのうつ木かき
いまをさかりとはなさきにけり　土鹿仙子

小山田のしづかいほりにうのはなの
咲けるやゆきとあやまたれける　甲斐莊優子

きえのころ雪かとも見んしつか家の
かきねみたれて咲ける卯のはな　田中りん子

卯の花のさけるあたりにやとりせむ
しつかふせやにあめはもるとも　岡田よね子

ひとしれぬ月のひかりをかさたもる
われのみ見よと咲けるうのはな　関千代子

田面なるかきねにさらすしらぬのは　関さら子

身なうのはなにつゝむなるらん

門のへに田うたきくへくなりぬらん
かきねのうつきいまさかりなり　德永萬壽子

立ちよりてみれは何處もおしなへて
かさ田のおもにさけるうのはな　澤田春子

さきならぬ雪かさみねて小やまたの
しつかかきねにさけるうのはな　羽田三緒子

さむからて早苗さるてもたゆむらん
かきのうのはなゆきさまかへは　河田いし子

早苗をはゆきかきわけてうゝるかさ
うたかふまてにさくうつきかな　川口政子

卯の花をわけゆくみちはくれねさも
さもし火みねつ小やま田のいほ　大竹治子

時わかすふれるゆきかさみるまてに
田つらのいほにうのはなのさく　稲木利家子

忘れすにたつねきたのゝほさゝきす
うのはなにほふやまかけのいほ　卜藏義江子

なつくさのしけるまゝなるやま里の
かきねすゝしくさけるうのはな　卜藏時代子

をやまたにゆきかふ道もうつもれて
ひさむらしろきうのはなのゆき　加賀山やす子

山田守りしつかゝきねの卯のはなの
ゆきかきわけてさなへさるらむ　小町谷里江子

うつ木咲く小田のあせみち白たへに
かけてなみこすはなの志からみ　小町谷園子

やまちかき山田にさける卯のはなは
ゆきかさはかりあやまたれけり　大溪紫子

小やま田の人目たねたる志つか家の
うのはなかきはたれゆひにけん　小幡富美代子

いなしきのふせやに咲けるうの花は
うきよのほかのいろにみねけり　土岐米子

志はかきの山田のいほをきて見れは
はるをへたてゝうのはなのさく　仁井田宮子

やまたよりかへる少女のそてしろく
にほふはつきかかきの卯つきか　上松きく子

うはたまのやみにも月さ見ねつるは
たなかのいほのうつ木なりけり　上松みな子

時つたふ田つらのいほのうつきかき
よな〳〵つきをやさしけるかな　碓井信子

このころはさかりにさけるうの花に
みちうもれけりをやまたのいほ　碓井武子

つれひころさひしき小田のかり庵も
うつきのはなにわすれけるかな　碓井和可子

をやまたの川そひうつ木咲きしより
やみこそなけれ志つかふせやも　石川きん子

門田もる志つかふせやのあれかきも
まはゆきまてにさける卯のはな　石川るい子

門田もるしつかかされのうのはふは
わつかにさらすぬのさころみれ　小野寺竹子

うすすみのたそかれそらにいち白く　館脇ます子

たなかのいほに見ゆるうのはな

やまたもる人のゆきゝの畦みちも
さりあへぬまてに咲けるうの花　讃井久眞子

しつかやの垣根にしろきうのはなに
田みちまさはぬしろへなりけり　田中冬子

むきのほの露ちるかせに吹きませて
しつかかき根ににほふうのはな　吾妻ちか子

てる日にも消ぬなてつもるしら雪は
しつかかき根にさけるうのはな　杉浦糸子

やまたもる賤のふせやにしろくゝさ
ゆきかさはかり咲けるうのはな　池谷富子

あれはてし山田のいほにうのはなの
ぬたもたわゝにさきにほひけり　古矢かま子

つきかけに門田のやさのうのはなの
かき根はゆきさとさぬまさり見ゆ　吉崎世根子

花ちりてさふひさもなきみやまへの
さゝわすゝしくうつき咲きけり　矢野ふさ子

ひるたにもくらきたつれの谷かけの
いほりまはゆくにほふうのはな　久門りゑ子

のかれすむぬしにやならふ世の中の
うきしらゆきとさけるうのはな　矢野高子

さなへとる田うたのこゑのきこぬすは
ゆきとみるらんかきのうのはな　高瀬孝子

しつのやは今やいさなくなりぬらん
かさのうつ木のはなさきにけり　眞鍋直子

こと更にせしかこ見ぬておかしきは
をたのわらやにさけるうのはな　田津木久子

かはつなく門たのおもはくれぬれと
かきれにしろくのこるうのはな　小森さた子

ゆふくれに家ちへかへるしつの女の
かきれましろに咲けるうのはな　北村貞子

さしこさに軒はにさけるうのはなを
なはしろさきのこよみさそ見る　北村正枝子

たやまたのしつか伏やのかきれにも
さくうのはなはあはれなりけり　北村孝子

繁りあふくさのほかなきひさつやの
かきれましろにさけるうのはな　藤井ます子

蛙なくたのもにたてるひさつやの
かきしろたへにさけるうのはな　清水あい子

餌をあさるすゝめのわひぬしら雪は
しつかかき根のうつきなりけり　杉山かれ子

うつ木さく山田のおくのはなれさと
ゆきのゝこれいへかさそおもふ　野中あさ子

よるなみの色たうはひて咲きにけり
きし田のいほのかきのうのはな　久松勢伊子

うの花のゆきにもいまはみちたぬて
やまたのいほはさふひさもなし　青羽茂枝子

ほのくゝさあくる田中のいほりにも
ゆきかさみぬてさけるうのはな　粟田口信子

小山田のしづがかきれのうつきはな　降田槇子

なつにものこるゆきさこそみれ
やまもとにつゝく田舍のうつ木かき
このころつきになりにけるかな
横田須磨子

賤かやのかきねにさけるうのはなは
あらひはりせし夏ころもかな
新開みちた子

うつきはな咲のさかりはやみの夜も
まよひ入らしな小田のほそみち
名取正代子

さゝひさも垣根つゝきのうのはなを
見れはゆきさそおもろかれぬる
安井章子

つききよくかきのうの花さかりなり
けにおもしろきやまさとのそら
北島切子

志ろ妙にうのはなさけるこのころは
ゆきにうもるゝなやまたのさと
林久子

あしひきの山田のさとのゆふつきよ
うのはなかきはやみなかりけり
楠精子

時知らぬゆきとみねしはゆふつきの
やまたのいほにさけるうのはな
木村衆子

うの花にそてはふれしとこゝろして
あゆめはせまき小やまたのいほ
中島房子

うつ木さく田中のいほのかきねみち
ゆふくれたそきこゝちこそする
溝口信子

さもすれはなれにし志つもうの花の
ひかりそみちのたよりなりける
西村菊子

ゆきとのみあやまたれつゝ小山田の
かきねつゝきにさけるうのはな
白井球子

時知らぬゆきとみねしは面白し
うつ木はなさく小山たのいほ
大島愛子

なやまたのかきねもいまやうの花の
さかりになれはやみなかりけり
大森純子

ほとゝす通はんみちのいちしろく
うのはなさけり小やまたのいほ
吉川國子

ひさとはねしつか門田のうのはなは
そらにしられぬつきよなりけり
吉川禮子

雪との見しばゆふへのそらめにて
うのはなさけるなやまたのいほ
岡田波子

このころは夕やみもなしうのはなの
さきのさかりの小田のふせいほ
荒井清子

ゆふくれのそゞろ歩行も面白し
うつ木ばなさく小やまたのいほ
西村佳子

日暮れとさゝぬ田伏のかきのとを
てらすひかりはうつ木なりけり
水島員子

ひさかたの月のひかりさみゆるかな
たなかのいほにさけるうのはな
高橋信子

うの花のさかりになれはぬはたかの
やみもあかるきしつかふせいほ
溝口寛子

志つか女かさらす布かさおもふらん
うつ木はなさく小やまたのいほ
成田延子

入りのころの月かけかさ見ゆるかな
うのはなさける小やまたのいほ
小川金子

おもしろく雪にまかひてさきにけり
小川富子

たふせのかさのうのはなのかき

しろたへのころもほすてふ夏くれは
　たなかのいほにさけるうのはな　長島綾子

朝けたくけむりもにほふこゝちして
　うのはなさけりしつかふせいほ　浦島龜子

やみのよもなほゆふ月の出てしかさ
　あやしまれぬるいほのうのはな　島田常子

なつくれはま白のころもさらせりさ
　まかへられけりいほのうのはな　島田好子

消ぬのころ田面のゆきさまかひしは
　やまたのかきのうつ木なりけり　町田鶴子

五月廿日　兼題　靖國神社に詣つ

地　播磨龍野　眞鍋直子

ひと日幼き子をいさなひて靖國神社に詣てぬそもこの御やしろは西南の戰ひまた征淸の役に御國の爲に軍にいてゝうち死なしたまへるわか忠勇なる人たちのみたまをいはひまつりたまへるところにていともかしこき大君の御みつからぬさたむけてをかませ玉ふ事なれは事さまのれころかなることもおもひしられぬへしかつわれ〳〵のかくやすらけく世に住なすもみな此神たちの御かけなれはたふとみあふくへきことにてそかく御國の爲に命をもをしますつとめて高きほまれをたててころ大和心のますらをとはいふへきなれなとゝかたらひつゝ御やしろをふしをかめはろのかみの事さまもめにもうかふやうれもひ出てられて幼き子らとともに袖をしほりあへずなん

人　山梨縣甲府市山田町　名取正代

ひと日學びの暇を得妹と共に父の君にしたがひそこはかとなくろゝろあるきしつゝ九段坂を登りて靖國神社にいたりぬそも此社は維新の際王事に盡力して忠勇ならびなかりし戰死の士をまつりしところなりされど祭の日はいふも更なり常の日と雖も參拜者織るが如し境内いと廣くして中に嘗て用ひたりと聞きつる大炮の横はれるあり又かたみにのこれる武器あるは戰死者の畫像其他くさ〳〵の品列ねたる館などありこれらを打見つゝ父の君のかたり給ふ戰の有樣を聞きていとゞ感じ入りぬされどてはれのれらいまだうまれ來ざりし時の事なればたゞ聞くがまに〳〵想像するのみなりされど近く去二十七八年征淸の戰の折或は新紙にあるは雜誌に委しくかゝぐるものを見たりけれど昔もかゝりし事なりけん戰死者の遺族の中には二人なき嗣子を失ひしもあるべくよるべなき孤兒となれるもあるべく老後饑

渇に迫るの輩もありしならん實にあはれむべきの極といふべしされど此死や實に常の死とは異にて其名譽は永遠に傳はりて朽つることなきを思へど又以て死者も冥すべく遺族も滿足すべきなり古語にも朝に道を聞きて夕に死すとも可なりといへりなどかたりあひつゝ日のやう〳〵西にかたふくころほひ家路につきぬ

佐々有都子

殉難死節の神靈を別格官幣社と祭祀りたまへる靖國神社は武藏國東京市にありうも〳〵百千萬の神靈等は朝の霜夕の露と吾皇國のため天皇のみたてとなり草むすかはれ水つくかはれのさには死なしとつとめいそしみたまひし大忠大義の神にしませはぬは玉の夜となくあかれとすめらなく老若男女八拍手うちならしぬさ奉りて拜まぬ人はなきものからましてや明治廿七年の戰場にかはれをさらしたまひつる神靈はことさら新しくふしをかみまつらてやはあるへきつたなき妾〻かゆかりの人々の神靈とへ今度はひとつ位の神等に合祀したまへることのかしこさ尊ささたとふへきものなく獨の淚をし𛂞りもあへす大ゆかにうなれつきぬきひとなりふせやたひをかみ奉るになんあなかしこ

田津木久子

けふは靖國神社のみ祭なりとてまうてゝをろかみまつるにつけてもかく盛んにいつきまつらるゝを見るにつけても限りなき大御代の御惠のかしこしともかしこく家をも忘れ身をも忘れて君のため國の爲いくさのにはの露と消ねましたるますらをたちのかく神といつかれて長く御國のまもりともなりかつは人皆のがゝみとあかめまつらせらるゝとへあるにましていともたふとき大君のみゆきまし〳〵てぬさ奉らせたまふ事とも思ひつれは御やしろのみたまはいふもさらなりそか父母の君妻子の人たちのよろこひやいかならむとおもほえすなみたのこほるゝにこそ

北村孝子

靖國神社は近き世に國事に倒れし人をまつれる御神にしてすきつる五日は例祭の一日なれはとて妾か所よりは程遠けれと滊車にてゆけはまたゝくひまなれはいてや一度は參詣せはやとともたちの進むるまゝ詣てしに此日はいとよく空はれわたりて加ふるに端午のせつなれは何れも參詣人は人の山をなしその賑はしさいはん方なく神社の大鳥居の左側には臨時祭神の齋場を設け其の右方には祭神の遺族案内所其の左方には之れか扣所あり後園廣場には相撲の土俵場神樂堂を設けありて撫神樂の催しもありけに〳〵盛なる事にこそ其土地と云ひ御社といひ世になき神社にそありける歸りつるのちも人々にかたりて夜な〳〵おそくなるをも忘らすなん

北島松子

一日おとゝひ打つれたちて九段坂上なる靖國神社に詣てたり社内の櫻花今を盛りと咲き亂れ其景色一入興あるなかめなりけりめくりて社頭に至りぬかつけは社の結搆今更に壯嚴高尙にしてそゝろにこの御社にいはひ祭らるゝ人々のありし昔の忍はれて時ならぬ時雨に袖そぬらしける恩愛深き父母やいとし其子や最愛の妻に別れて國の爲め二つなき身を捨てし其身は幾春秋之末迄も芳はしき名を靖國の神の社の高樓に祭らせられてその功は世の常人の成し得さるいとも尙き功蹟そかしさはさりなからかしこくも今の帝の此くも國君の爲に忠死せし士なれはとてかくも厚く祭らせられ猶

御身自から禮拜成させ給ふ大御心の程あり難くも亦感涙之外そなき折からそよとの風もなきに櫻花の一ひら二ひら社前に散るもぬさの如くにてなき人々の靈魂をなくさめはやと無情の花も思ふらむやがて御前をしりそきをるなきおとゝのくさき召に答へきかせなさしつ家路をさしてたどりぬ

明治廿九年卯月廿日あまりの日認む

月々の女鑑を見て　　畠山千代子

此ふみをかゞみとなしてわけいらは
　をみなの道にいかでまよはん

楠正行朝臣　　仝

そこ深きをしへをくみしさくらゐに
　そでをぬらさぬひとはあらしな

落花　　鎌田きくの子

をしめともかひなくちりて朝ことに
　にはしろたへにつもるはなかな

燕　　仝

春の野のかすめるそらにひきつかひ
　ふるすたつれてつはめきにけり

首夏　　內田ゆか子

はなの香もそでにのこらすくれ竹の
　ひとよのほどになつはきにけり

山新樹　　仝

しらゆきとまがひし花のあともなく
　みどりふかしやなつのやま〳〵

新竹　　小町谷里江子

生ひ出でし庭のわかたけおのつから
　八千代へぬへきいろは見えけり

六月兼題

五日
- 歌……梅雨霽
- 文……田家を見る

廿日
- 歌……六月大祓
- 文……子規を聞く



生田目經德編

標註 雅文消息集 全

菊版美本

全一冊

近刊

日用消息文の摸範は中古文にとらざれむ雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學び日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさむ益を得ること必大なるべし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
（電話番號一九四六）

女鑑第百八號目錄

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年五月十九日印刷
同 年五月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衞
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所(電話番號一九四六) 國光社

(印刷所 東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日内務省許可 明治廿五年三月十二日遞信省認可)